

報告資料

安里 進

- 1、正殿欄干親柱の獅子像の検討
- 2、大龍柱遺物の3D合成
- 3、小龍柱の胴体捻れの検討
- 4、玉座御床の「黄塗り」技法

- ・1～3は、首里城復元に向けた技術検討委員会の彩色彫刻作業チームの会議において、令和4年4月～令和5年3月にかけて報告してきた資料を整理したものである。個別に報告してきた資料のため用語の統一が十分でない。
- ・4の玉座御床の「黄塗り」技法については、2023年3月4日の「新・琉球漆芸会議2023」（浦添市美術館主催）で報告したレジュメを掲載した。これは、昨年3月の「第1回首里城復元に向けた技術検討委員会報告会」で報告した「漆塗装関係報告資料」に、皇帝扁額の「黄色塗り」情報を追加して要約したものである。

1、正殿欄干親柱の獅子像の検討

1) 平成復元獅子像の問題点

- 正殿正面の基壇と石階段の欄干には、北側・南側に合計 12 本の親柱に獅子像が彫刻されていた（図 1 ○印）。
- これらの獅子像は、明治期にすべて欠失したため古写真では具体的な形状を確認することができない。
- 「王国末期古写真」（仏海軍撮影）でも不鮮明なシェルエット状態だ（図 9 参照）。

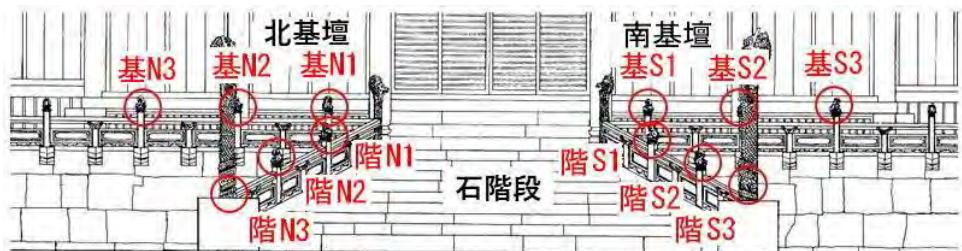


図 1：正殿の基壇と石階段の親柱獅子像

- 『寸法記』『御普請絵図帳』『正殿前城元仲秋宴設営絵図』『正殿前城元設営絵図』などの 18~19 世紀の王府絵図には 12 本の親柱に獅子像が描かれている。
 - これらの絵図の獅子像は、単体で（毬や子獅子を伴わない）、南北の獅子の体部が向き合う（相対向き）という点で一致している。
 - しかし顔の向きに違いがある。『寸法記』と『御普請絵図帳』の獅子は御庭に向くが、「正殿前城元仲秋宴設営絵図」と「正殿前城元設営絵図」は体部と同じく南北で向き合う（相対向き）。
 - ここでは、獅子像の顔面の向きについて、①体部と同じ向きを「前向き」、②体部に直角向きであり向く形を「横向き」と呼ぶことにする。
-
- 一方、平成復元の獅子像は、体部や顔の向きが絵図と異なるだけでなく、絵図にはない毬や子獅子を伴うものがある。
 - 平成復元の獅子像の姿態は、史資料の根拠がなく任意に制作したものであり再検討が必要である。

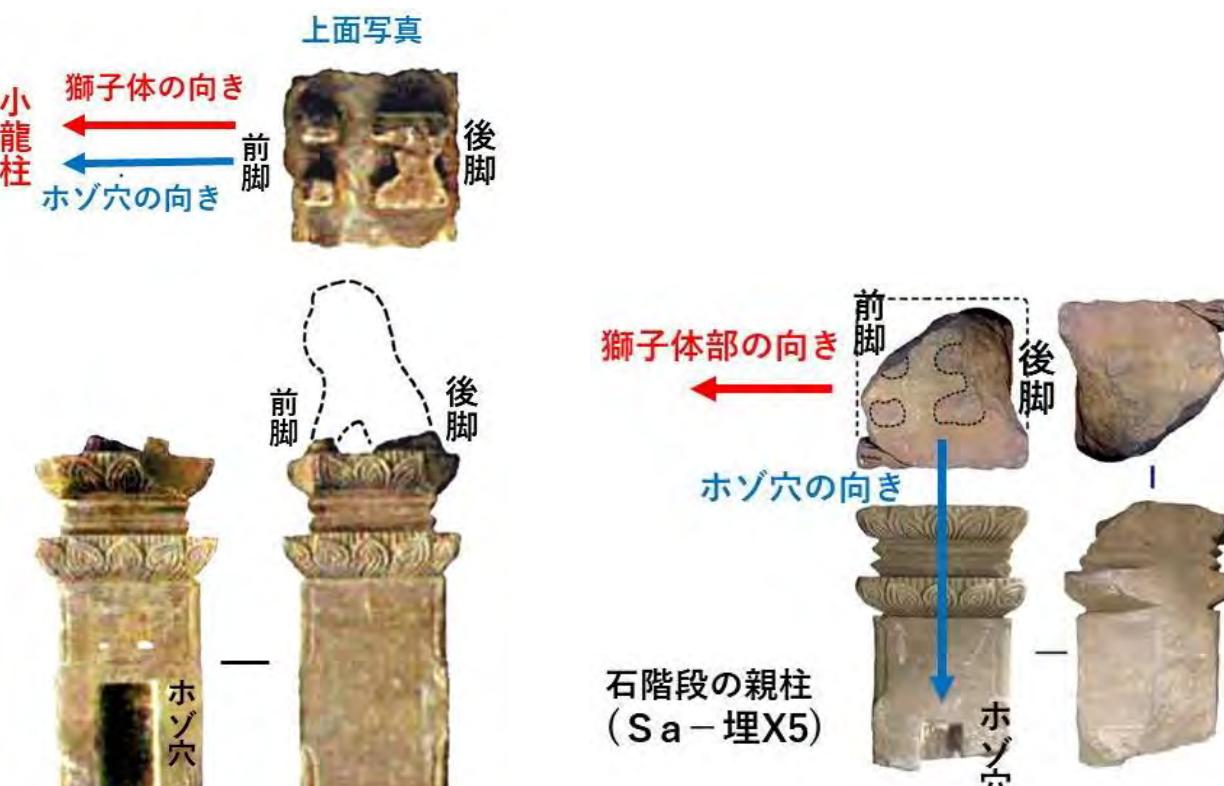


図 2：左から『寸法記』『正殿前城元設営絵図』平成復元の親柱獅子像

2) 出土遺物から獅子体部の向きや毬・子獅子の有無が分かる

獅子像の脚痕がある欄干親柱の出土遺物と獅子像体部の向き

- ・欄干親柱の出土遺物には、獅子像台座に脚の痕跡が残っている。大きい後脚と小さい2つの前脚の位置から獅子像体部の向きが分かる。
- ・親柱には笠石を連結するためのホゾ穴がある。遺物のホゾ穴の位置から、基壇の親柱と石階段の親柱の区別ができる（第1回報告会の安里報告資料III-4 参照）。
- ・ホゾ穴の位置と脚跡から、獅子像体部の向きが分かる。
- ・首里城跡正殿地区出土の基壇の親柱遺物2本（Sa-埋2016-11*、Sa-埋2016-12*）について、獅子体部が小龍柱の方向に向くことを確認した。*首里城跡正殿地区出土遺物No.
- ・基壇の親柱遺物の獅子像は、南北基壇の親柱獅子像体部がホゾ穴の方向（小龍柱の方向）に向く相対向きである（図3）。
- ・石階段親柱遺物（Sa-埋X5*）も、南北欄干の獅子体部が階段の内側に向く（向き合う）相対向きだ（図4）。*正殿地区出土の未報告遺物
- ・また、基壇・石階段の親柱遺物には毬や子獅子の痕跡がない。正殿の親柱獅子像は、絵図と同じく毬や子獅子を伴わない単体だったことも確認できた。



基壇の親柱（Sa-埋2016-11）

図3：基壇親柱の獅子体部の向き

獅子体部は、ホゾ穴の方向（小龍柱の方向）に向いている。

図4：石階段親柱の獅子体部の向き

ホゾ穴の位置と脚痕による獅子体部の向きが図3の基壇親柱と異なる。

3) 古写真から獅子体部の向きが分かる

基壇獅子像の遺物と古写真の比較

- ・親柱遺物の側面図と上面図における獅子前脚と後脚の位置的対応関係は、図5のようになり、側面図の前脚・後脚から上面の前脚・後脚の位置がわかる。これとホゾ穴の位置から獅子像体部の向きを知ることができる。
- ・遺物におけるこの関係を、親柱を側面から撮影した古写真に応用することで、獅子像体部の向きを知ることができる。
- ・図6左は、南基壇の基S2（図1参照）の古写真に、親柱遺物Sa-埋2016-11の上面図を基S2の撮影アングルに合わせて配置したものである。
- ・古写真の基S2獅子台座には、左側に小さい前脚、右側に大きな後脚の痕跡が写っている。
- ・Sa-埋2016-11と基S2は、獅子像台座コーナー部分の欠損状態や前脚・後脚の位置も一致するので、Sa-埋2016-11が基S2の残欠と特定できる。
- ・古写真の基S2の左右に笠石が連結している。ホゾ穴はこの連結面にある。
- ・古写真の脚痕石と笠石の位置から、基S2の獅子像体部がホゾ穴の方向（小龍柱の方向）に向いていたことが確認できる。
- ・同様な作業をSa-埋2016-12について古写真との比較を行った結果、Sa-埋2016-12は南基壇の基S3の残欠で、いずれも獅子像体部が小龍柱に向いていたことを確認した。

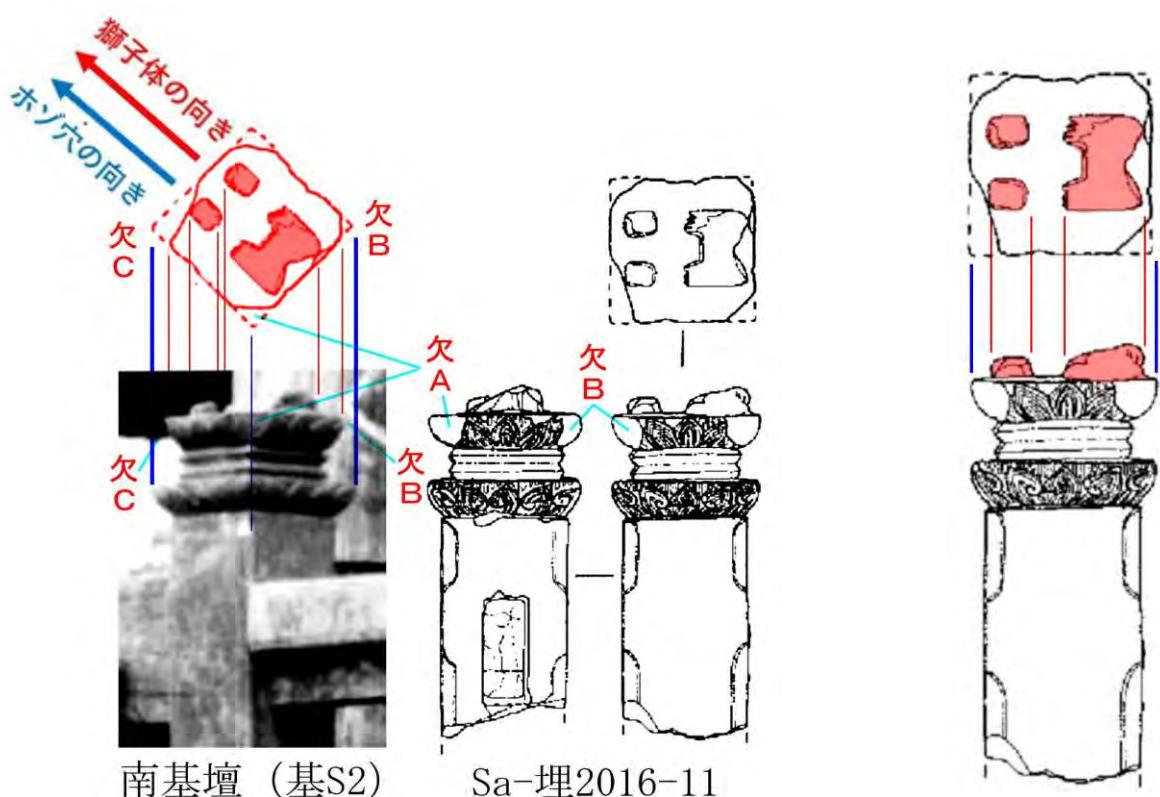


図6：Sa-buri 2016-11と南基壇(基S2)の比較による獅子像の向き
基S2古写真是鎌倉芳太郎写真 (K1246)

図5：側面と上面の前脚・後脚の位置的対応関係 (Sa-buri 2016-11)

石階段親柱獅子像（古写真）の分析

- 同様な作業を、Sa-埋 2016-11 の上面図をモデルにして、親柱の獅子像脚部が写っている石階段親柱の階 S2・階 S3 の古写真各 4 枚についても実施した（図 7）。
- 石階段の階 2・階 3 の 8 枚の写真すべて獅子像体部がホゾ穴方向に対し直角の方向に向いている。つまり、遺物の分析結果と同じく、古写真でも南北石階段の獅子像は階段内側に向く向き合（相対向き）であることが確認できる。

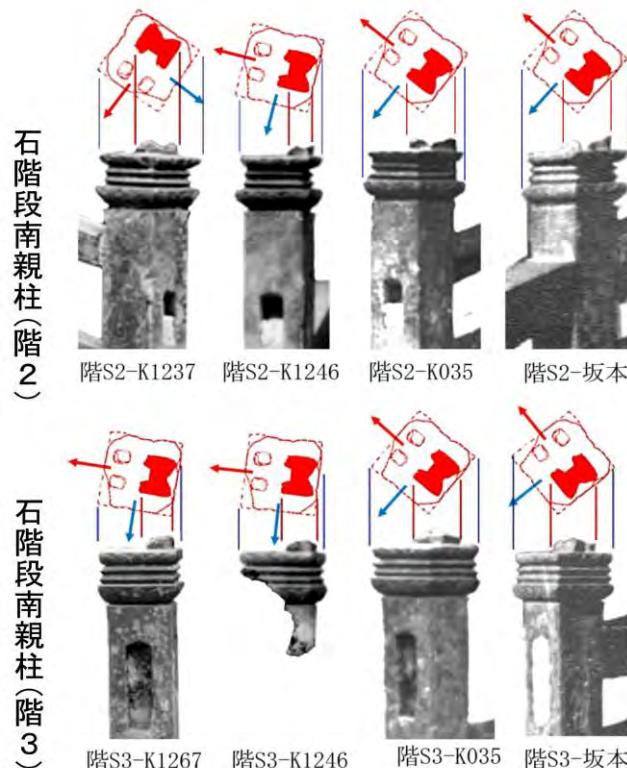


図 7：石階段南親柱（階 2・階 3）の獅子像体部の向き
矢印の赤は獅子像体部の向き、青はホゾ穴の方向。「K1237」などの K 番号は鎌倉芳太郎写真番号、「坂本」は坂本万七写真。

- 図 8 は、以上の分析結果で判明した基壇・石階段の親柱獅子像体部の向きである。
- 基壇・石階段とともに、南北の獅子像体部が向き合う相対向きだったと考えられる。

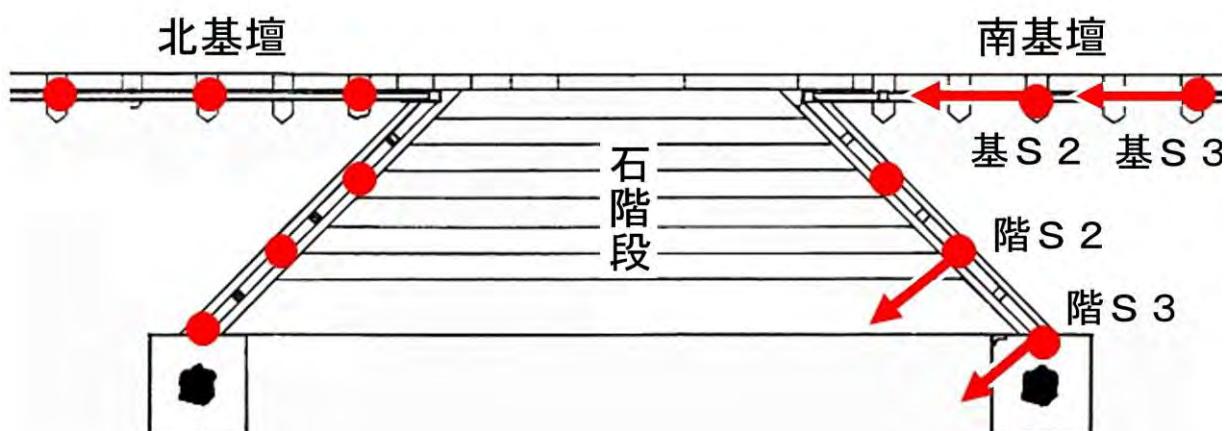


図 8：遺物と古写真から判明したの獅子像体部の向き

4) 獅子像顔面の向きの検討——玉陵の欄干親柱獅子像との比較

「王国末期古写真」の獅子写真

- ・親柱の獅子像体部の向きは、親柱の遺物（実物）の分析で判明したが、顔面の向きについては親柱の遺物からは解明できない。
- ・顔面の向きについて、正殿の「王国末期古写真」（仏海軍古写真）と玉陵の古写真について、獅子像のシェルエット画像を比較検討した。

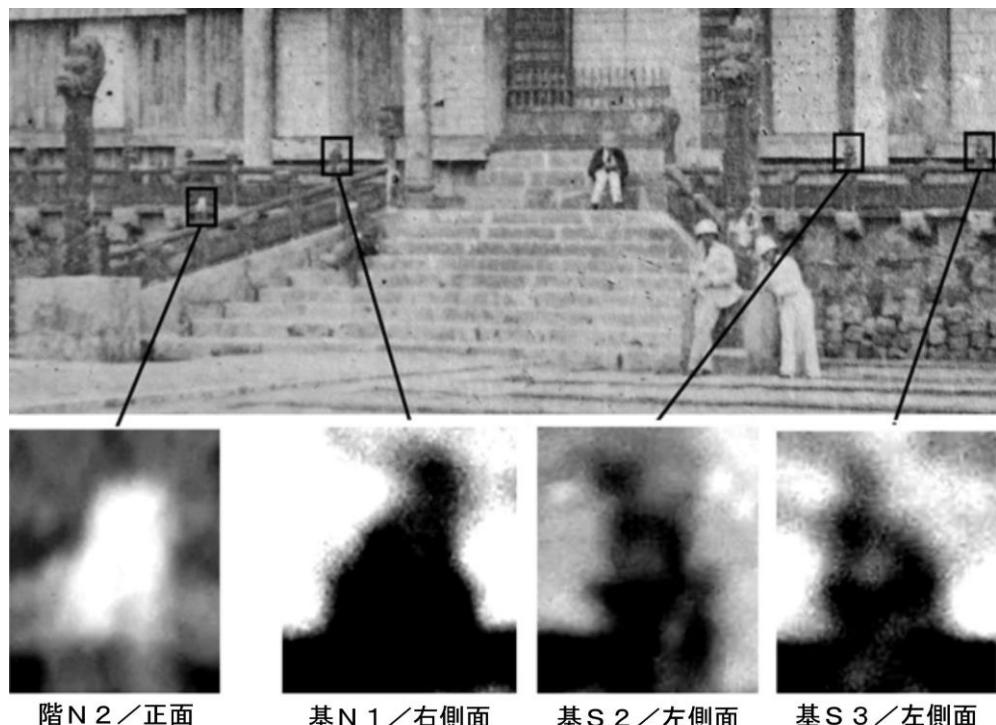


図9:「王国末期古写真」の親柱獅子像拡大

「王国末期古写真」はエルヴェ・ベルナール氏（在フランス）所蔵。

- ・獅子像の画像は、輪郭を出すためにコントラストを強調する画像処理を行った。
- ・階N2は、ハレーションを起こしており、補修による新造と思われる。
- ・「王国末期古写真」の4カ所の親柱獅子像については、輪郭が大づかみながら分かる。
- ・親柱の遺物分析から、「王国末期古写真」の獅子像は、図10の形だったことが分かる。
- ・いずれも顔面の向きは不明。



図10:「王国末期古写真」の獅子像模式図

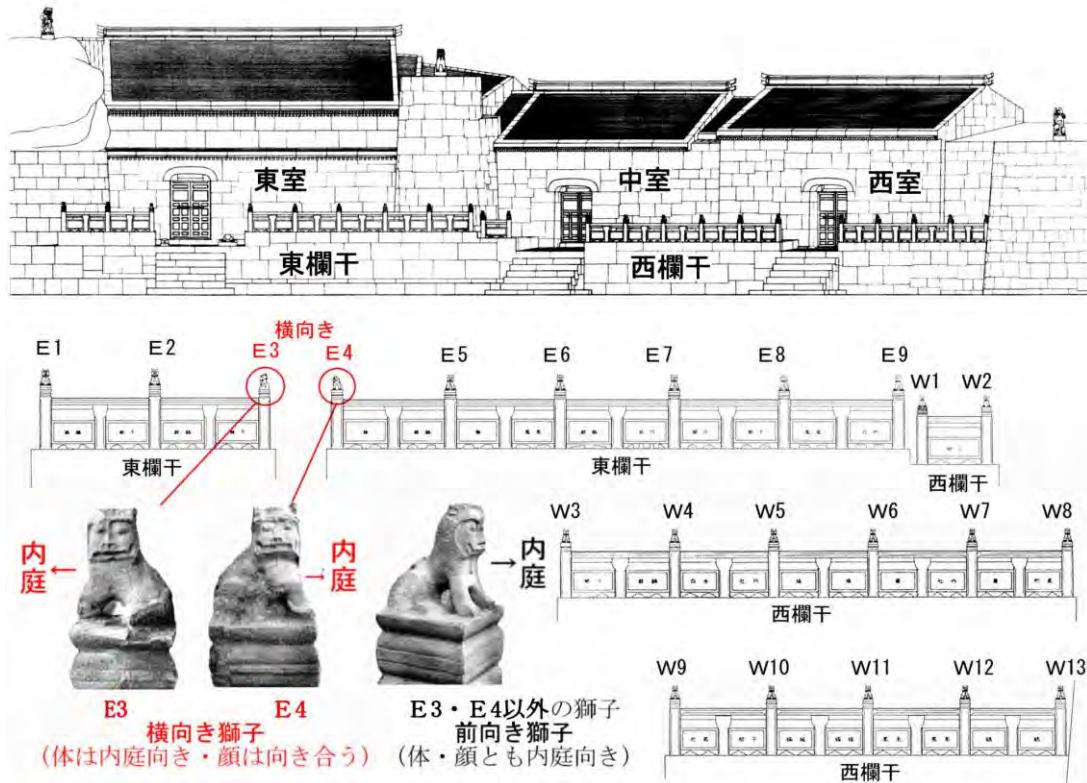


図 11：玉陵基壇欄干の獅子像

『重要文化財玉陵復原修理工事報告書』(玉陵復原修理委員会 1977) から作製。

玉陵の欄干親柱獅子像

- 正殿欄干親柱の獅子像顔面の向きについて、「王国末期古写真」と琉球王陵の玉陵(たまうどうん)の獅子像を比較検討した。比較の方法は、獅子像シェルエットの比較である。
- 玉陵と比較した理由は、①玉陵が首里城正殿を模して造営された、②正殿と同様に基壇欄干の親柱に獅子像が彫刻されている、③正殿と同じく毬や子獅子を伴わない単体である*、④顔面に「前向き」と「横向き」があることなどである。*東欄干のE3だけは子獅子?を伴っている。
- 玉陵には東側基壇の欄干(東欄干)と西側基壇の欄干(西欄干)に親柱が22本あり、全てに獅子像が彫刻されている(図11)。
- 東室正面階段の左右に対応する親柱獅子像2体(図11の東欄干E3・E4)は、体部は向き合うが顔面は内庭に向く「横向き」である。
- 他の20体は、全て「前向き」(体部・顔面ともに内庭向き)。
- なお、玉陵の親柱獅子像を含む欄干の年代については、玉陵は1501年頃の造営ではあるが、①ニービヌフニ製、②欄干羽目石の彫刻が簡略化している、などの特徴からみて17世紀以降の製作と考えている。
- 玉陵は、沖縄戦で大破したため1974~77年にかけて復原修理が行われた。親柱獅子像も殆どが失われたため残存した3点(E3・W4・W8)を除いた19体は残存獅子像をモデルにした新造である。
- 残存3点の親柱獅子像のほかに、博美に2体の玉陵欄干の獅子像残欠がある(後で紹介する)。

玉陵獅子像の顔面の特徴

- 図12に玉陵獅子像写真の「輪郭」に現れる顔面の特徴を整理した。図の○印は、「王国末期古写真」の獅子像と同じアングルで撮影された獅子像写真である。
- 玉陵の獅子像顔面の向きには2形態がある。①「前向き」(体部と同じ向き)、②「横向き」(体部と直角向き、ふり向く形)。
- 「前向き」は、左右側面の写真では顔面が突出するが、正面写真では顔面が突出しない。尻が左側または右側に見える特徴がある。
- 「横向き」は、左右側面の写真では顔面が突出せず、正面画像では顔面が突出する。尻が左側または右側に見える特徴がある。

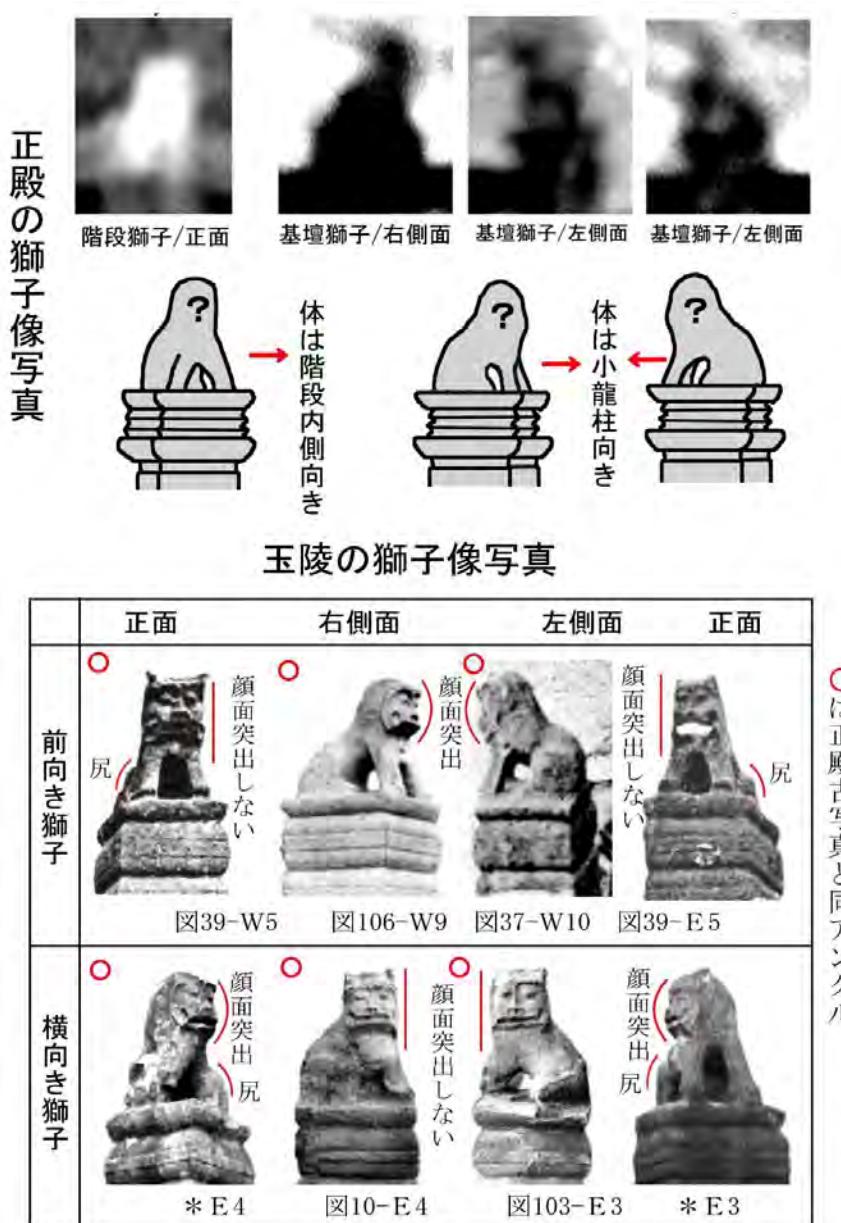


図12：玉陵の親柱獅子像——輪郭の特徴

正殿欄干獅子像写真と玉陵欄干獅子像写真の比較

- ・「王国末期古写真」の獅子像とおおむね同アングルで撮影された玉陵の獅子像古写真を比較材料にした（図13）。
- ・正殿基壇の獅子像（側面写真）は、玉陵の「前向き」獅子像の側面写真と顔面突出で一致するが、玉陵の「横向き獅子像」の左右側面写真とは特徴が一致しない。
- ・正殿階段の獅子像（正面写真）は、玉陵の「前向き」獅子像写真と顔面突出で一致するように見える。
- ・玉陵と正殿の獅子像写真の比較では、正殿獅子像は、基壇・階段ともに体部と顔面の向きが同じ「前向き」と考えるのが妥当。
- ・少なくとも、顔面が御庭を向く「横向き」とする積極的な根拠を得ることはできなかった。

正殿		玉陵				一致度
左側面		左側面				
		右側面				
		正面				
		横向き（振り向き）	左側面			
			右側面			

図13：「王国末期古写真」の正殿獅子像と玉陵獅子像古写真の比較

*印は、復原修理後の写真（ただし戦前の残欠である）

5) 沖縄県立博物館・美術館蔵と観宝堂蔵の獅子像残欠の検討

正殿欄干獅子像の可能性が高い獅子像残欠

- 沖縄県立博物館・美術館（以下「博美」）と観宝堂には欄干親柱獅子像と考えられる小さな獅子像残欠6体がある。まず、6体のうち正殿欄干親柱の獅子像残欠の可能性が高い博美蔵残欠「不明C」について説明する。
- 博美蔵の不明C（図14）は、頭部～胴部の破片で、脚部を欠く。毬や子獅子を伴わない。
- 採集地不明。正殿欄干親柱の獅子像と同じニービヌフニ（細粒砂岩）製と思われる。
- 玉陵獅子像に比べて、全体に丸みを帯びた彫刻で、頭部がやや大きい。全体にやや摩耗しているが、文様の彫刻は細かく丁寧。
- 正殿欄干親柱から分析した獅子像の特徴（毬・子獅子を伴わない単体、顔面前向き）が一致する。
- 下面に、接合修理の穿孔がある（図15中央）。
- 正殿親柱（Sa-埋 2016-X）の獅子像台座面（図15右）にも、欠損した獅子像を接合するための穿孔が2つある。1つの穿孔には鉄芯棒が差し込まれている。
- 不明Cが、穿孔がある親柱遺物（Sa-埋 2016-X）に接合するのか不明。



図14：博美蔵の獅子像残欠（不明C）

- ・図15 左は、獅子像脚部の一部が残った正殿基壇親柱（Sa-埋-2016-11）に、博美獅子像を同一縮尺にして載せた図である。
- ・不明Cは、欠損部分を補えば無理なく正殿欄干親柱に接合できる。
- ・不明C像は、正殿欄干親柱から分析した獅子像の特徴や、石材、サイズが一致する。
- ・欄干親柱に獅子像を彫刻した事例は、正殿基壇、奉神門中央階段、玉陵基壇、円覚寺放生橋欄干の4カ所しか知られておらず、この獅子像が正殿の親柱獅子像になる可能性が高い。

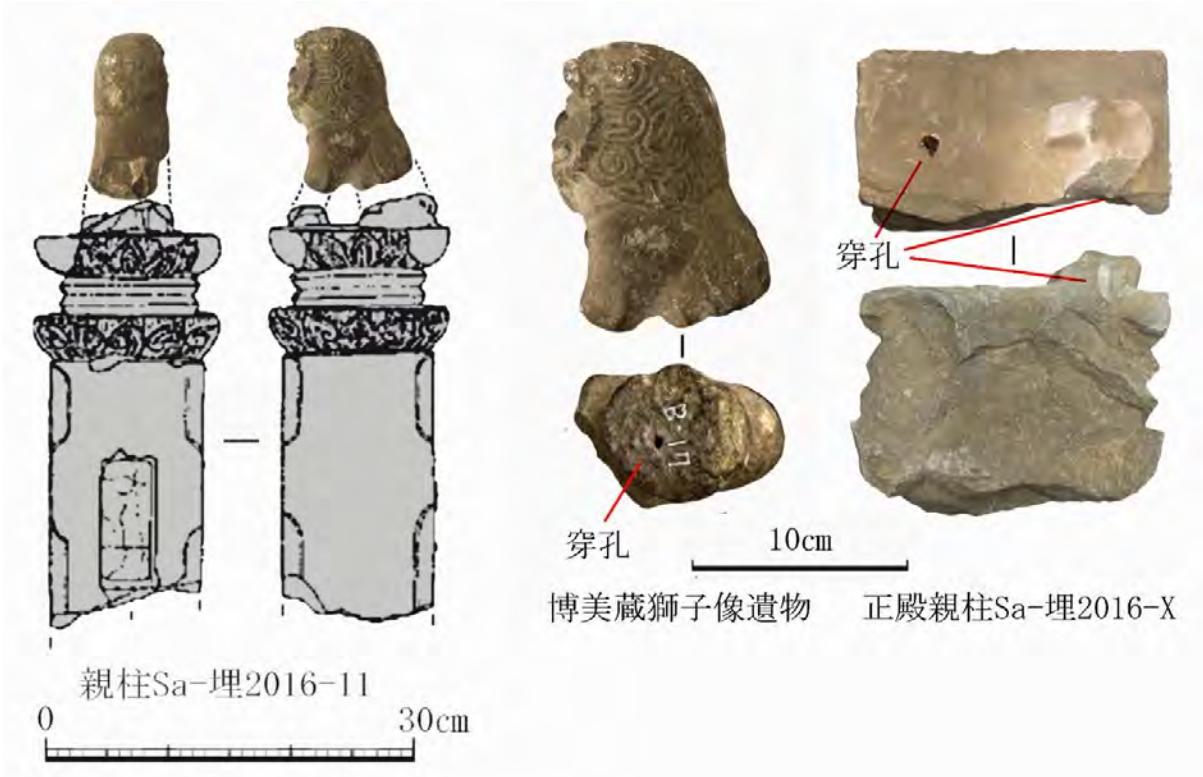


図15：博美蔵不明Cを正殿基壇の親柱に載せる

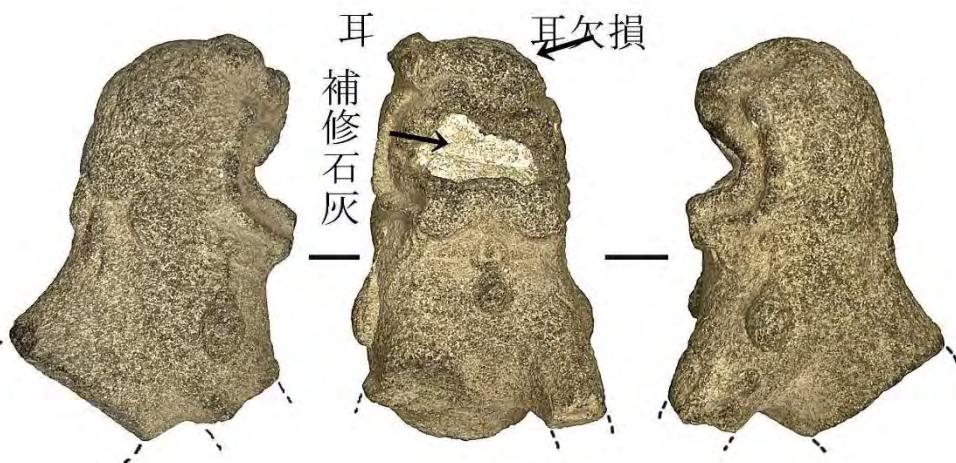
獅子像残欠 6 点の検討

- ・ ここでは、博美蔵の獅子像残欠 5 点と観宝堂蔵 1 点の獅子像残欠について分析した結果を整理する。
- ①円覚寺放生橋の獅子像残欠（観宝堂蔵）。「龍潭採集品」と伝わる。
- ②玉陵欄干の獅子像残欠 2 点（博美蔵）。ラベルには「（玉陵高欄獅子？）」とある。
- ③不明 A（博美蔵） ラベルには「放生橋石橋欄干獅子」とある。
- ④不明 B（博美蔵） ラベルに「1962.4.11 龍淵橋下ヨリ、多和田氏」の墨書注記あり。
- ⑤不明 C（博美蔵） ラベルには「不明」とある。採集地不明。

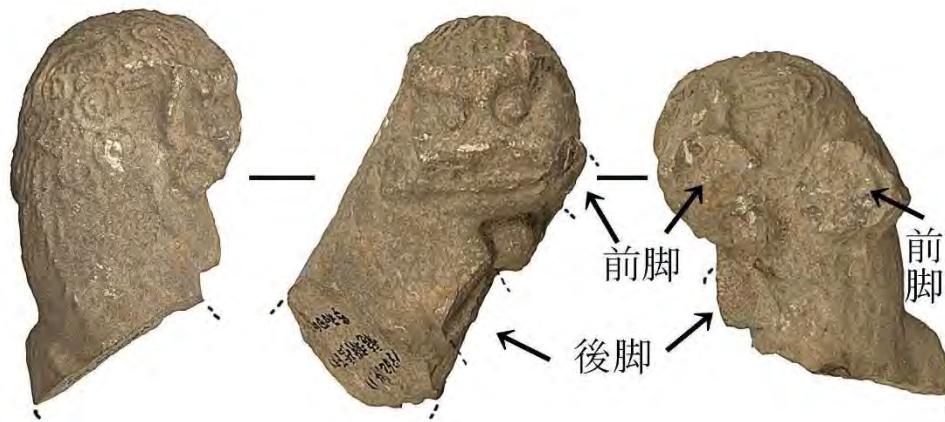


図 16：円覚寺放生橋と玉陵欄干の獅子像残欠

不明 A (県博美蔵)



不明 B (県博美蔵)



不明 C (県博美蔵)



0 10cm

図 17 : 不明残欠 A · B · C

円覚寺放生橋の古写真分析

- ・観宝堂蔵と博美蔵不明Aが、放生橋欄干の残欠にあたるのか検討した。
- ・検討のベースにした放生橋の古写真は、鎌倉芳太郎撮影古写真など15点である。
- ・放生橋の獅子像古写真を、北欄干・南欄干にそれぞれN 1～4、S 1～4の番号をつけて整理した。
- ・南北欄干の8本の親柱にそれぞれ獅子像が彫刻されていたが、大正期には南欄干のS 1・S 3の獅子像上半分が欠損しており、全体が残るのは6体である。
- ・放生橋の獅子像は、8体とも子獅子または毬を伴う。
- ・顔面の向きには「前向き」と「横向き」がある。
- ・対になる南北欄干の獅子像は、顔面が向き合う構図になっている。
- ・明確に阿吽を区別した彫刻や、阿吽を対にしているように見えない。

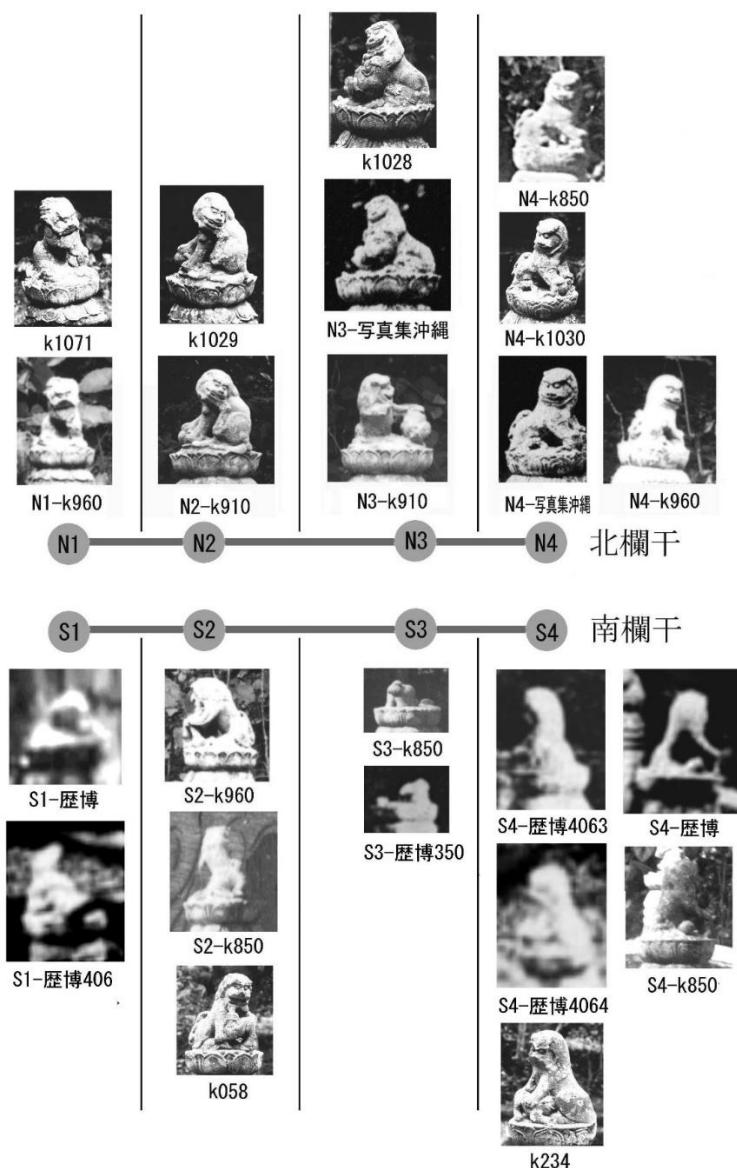


図 18：放生橋北欄干・南欄干の親柱獅子像古写真

観宝堂蔵獅子像残欠の検討

- ・観宝堂蔵獅子像残欠は、放生橋古写真の北欄干N 4 獅子像とピタリと重なる。
- ・また、石材も放生橋獅子像と同じ「青石」と考えられる。
- ・観宝堂蔵獅子像残欠は、放生橋獅子像と断定できる。



図 19：観宝堂蔵獅子像残欠と放生橋北欄干N 4 古写真の重ね

博美蔵不明Aの検討

- ・石材はいわゆる「青石」と考えられる。
- ・不明Aは、顔面「前向き」。
- ・放生橋の「前向き」獅子像には北欄干のN 1とN 3がある。
- ・N 1は前脚を毬の上に置く。N 3は前脚を子獅子の上に置く。
- ・一方、不明Aは、両前脚を下に踏ん張っていて、子獅子や毬の上に置いていない。
- ・N 1は吽形（口閉じ）だが、不明Aは阿形（口開き）。
- ・放生橋の現存獅子像残欠（観宝堂獅子像残欠）とは風化の状態が大きく異なり、同一橋の獅子像とは思えない。
- ・不明Aは、のラベルには「放生橋石橋欄干獅子」とあるが、放生橋獅子像ではない。
- ・おそらく、石材が放生橋欄干と同じ「青石」と考えられたことから「放生橋石橋欄干獅子」と判断したと思われる。

博美蔵「玉陵欄干獅子」の検討

- ・博美蔵の「玉陵欄干獅子」は、耳が突出し、口の牙を強調する特徴がある。
- ・この特徴は、玉陵獅子像の特徴と一致する。
- ・材質もニービヌフニ製で一致し、風化が進行している点も共通する。
- ・この獅子残欠は、玉陵欄干親柱獅子像とみて間違いない。

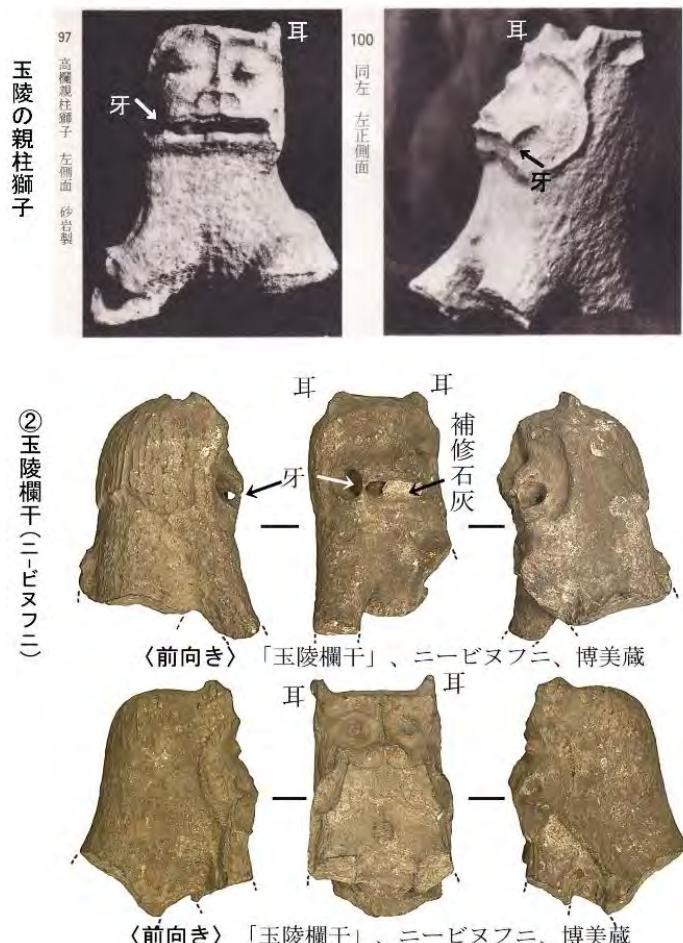


図 20：博美蔵「玉陵欄干獅子」と玉陵親柱獅子像古写真の比較

不明 A・B・C の検討（まとめ）

- ・不明 A は、放生橋獅子像でもなく、「青石」という点で玉陵の獅子像とも異なる。
 - ・不明 B・C もニービヌフニ製という点で放生橋の獅子像でないことは明らかである。また、玉陵獅子像の特徴もない。
 - ・不明 C は、放生橋・玉陵獅子像よりひとまわり小さく、これらとは別の獅子像である。
 - ・不明 A・B・C は、放生橋や玉陵の獅子像ではない。
-
- ・欄干親柱に獅子像を彫刻する事例は、首里城正殿・奉神門、円覚寺放生橋、玉陵という王府・王家の重要施設に限られている。
 - ・上記以外の石橋欄干の親柱には逆蓮頭や擬宝珠が載る（天女橋、世持橋、崇元寺橋、美栄橋など）。〈獅子像—逆蓮頭—擬宝珠—無頭飾り〉とう欄干のランク付けがあったのかも知れない。
-
- ・不明 A は、「青石」製とみられるので、18~19 世紀の正殿欄干の獅子像ではない。
 - ・不明 B も、〈横向き+子獅子?〉という点で 18~19 世紀の正殿欄干の獅子像ではない。
 - ・不明 C は、①ニービヌフニ製、②顔面「前向き」、③子獅子・毬を伴わない、④正殿親柱にちょうど載る小振りのサイズ、という点で正殿欄干の獅子像である可能性が高い。
 - ・不明 A・B は、18 世紀以前の正殿欄干または奉神門欄干の獅子像になる可能性が高い。

6) 獅子像残欠の大きさと親柱の太さの関係

欄干親柱の太さ

- ・博美蔵の獅子像残欠「不明 C」について、①ニービヌフニ製、②顔面「前向き」、③子獅子・毬を伴わない、④正殿親柱にちょうど載る小振りのサイズ、という特徴から「正殿欄干親柱の獅子像である可能性が高い」と判断した。
- ・そのうち④について、獅子像残欠の大きさと親柱（柱身部）の太さは対応関係にあると考えられたため追加の検討を行った。

- ・親柱柱身（断面方形）一辺の寸法（後述表 1）は戦前の正殿親柱が最も小さい。

円覚寺放生橋	19 cm
龍淵橋	18 cm (推定値)
玉陵	16.9 cm (東欄干平均値) 15.2 cm (西欄干平均値)
正殿地区出土の古型式親柱	14.7 cm (Sg 型式平均値)
正殿地区出土の戦前親柱	12.4 cm (Sa 型式平均値)

- ・正殿地区出土の古型式親柱は、奉神門欄干親柱の可能性がある。



図 21: 正殿地区出土の親柱型式

- ・欄干親柱の太さは、円覚寺放生橋や龍淵橋のように人々が往来する橋の親柱は太く、正殿欄干や玉陵欄干のように人の往来が殆どなく装飾の要素が強い欄干親柱は細くなる傾向がある。
- ・獅子像残欠の大きさを数値で比較できないが、図22のように親柱の太さに対応して獅子像残欠も小さくなる。
- ・獅子像残欠の大きさと親柱の太さの対応関係からみても、博美蔵「不明C」を戦前の正殿欄干親柱獅子像に比定した判断は妥当と考える。

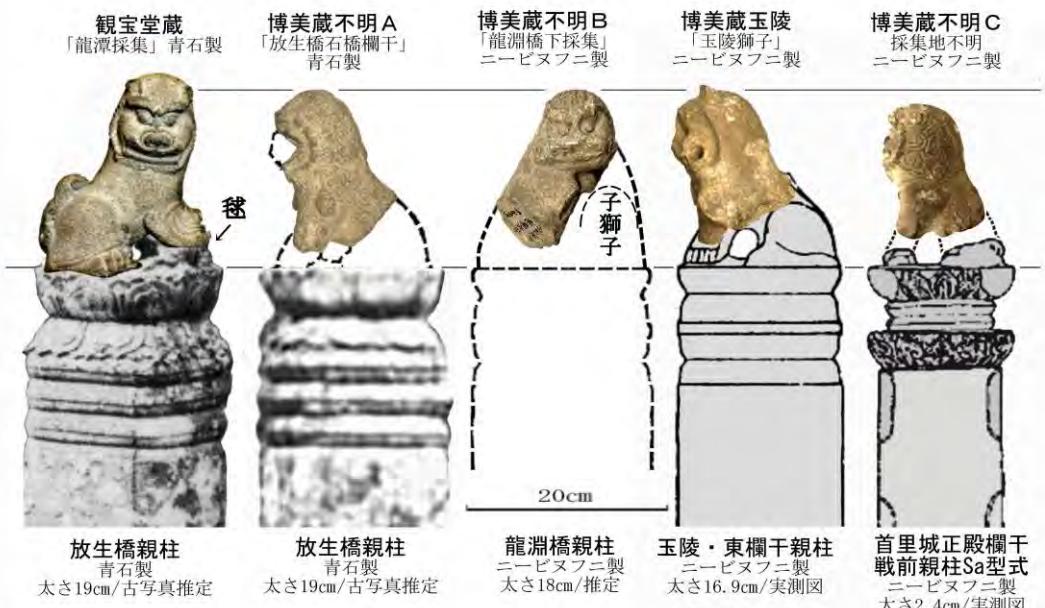


図22：獅子像残欠の大きさと欄干親柱柱身の太さ（サイズ統一）

円覚寺放生橋の欄干親柱の太さ

- ・次に、放生橋と龍淵橋の欄干親柱太さの推定方法と、玉陵と正殿の欄干親柱の平均値について説明する。
- ・放生橋親柱の太さを実測していないので、観宝堂蔵獅子像残欠の寸法を基準にして、古写真との重ね画像（図23）から測定した。写真と獅子像残欠の撮影アングル差のため誤差はあるが、一辺は概ね 19 cmになる。*その後、『円覚寺3』（沖縄県埋蔵文化財センター 2021）の放生橋実測図でも約 19 cmであることを確認した。
- ・放生橋獅子像が載る蓮華座は円形で、蓮華座の直径が柱身の一辺にあたる。

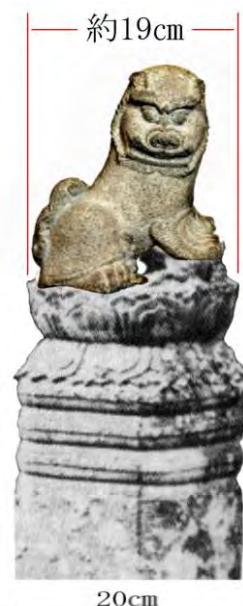


図23：放生橋親柱の太さ

龍淵橋欄干親柱の太さ

- ・博美蔵「不明 B」の台帳には「龍淵橋下ヨリ」とあるので、龍淵橋親柱の太さも検討した。
- ・龍淵橋親柱については、遺物は現存せず、古写真でも太さを測定できないが、首里城正殿の欄干持送り石と親柱の構造を参考にすることで、現地に残存する龍淵橋の持送り石から親柱の太さが推定できる。
- ・正殿の親柱は持送り石の溝に立てられており、持送り石の溝幅と親柱の太さのサイズが一致する。
- ・龍淵橋の持送り石の溝幅は 18 cm で、この数値が龍淵橋欄干の親柱の太さと推定できる。

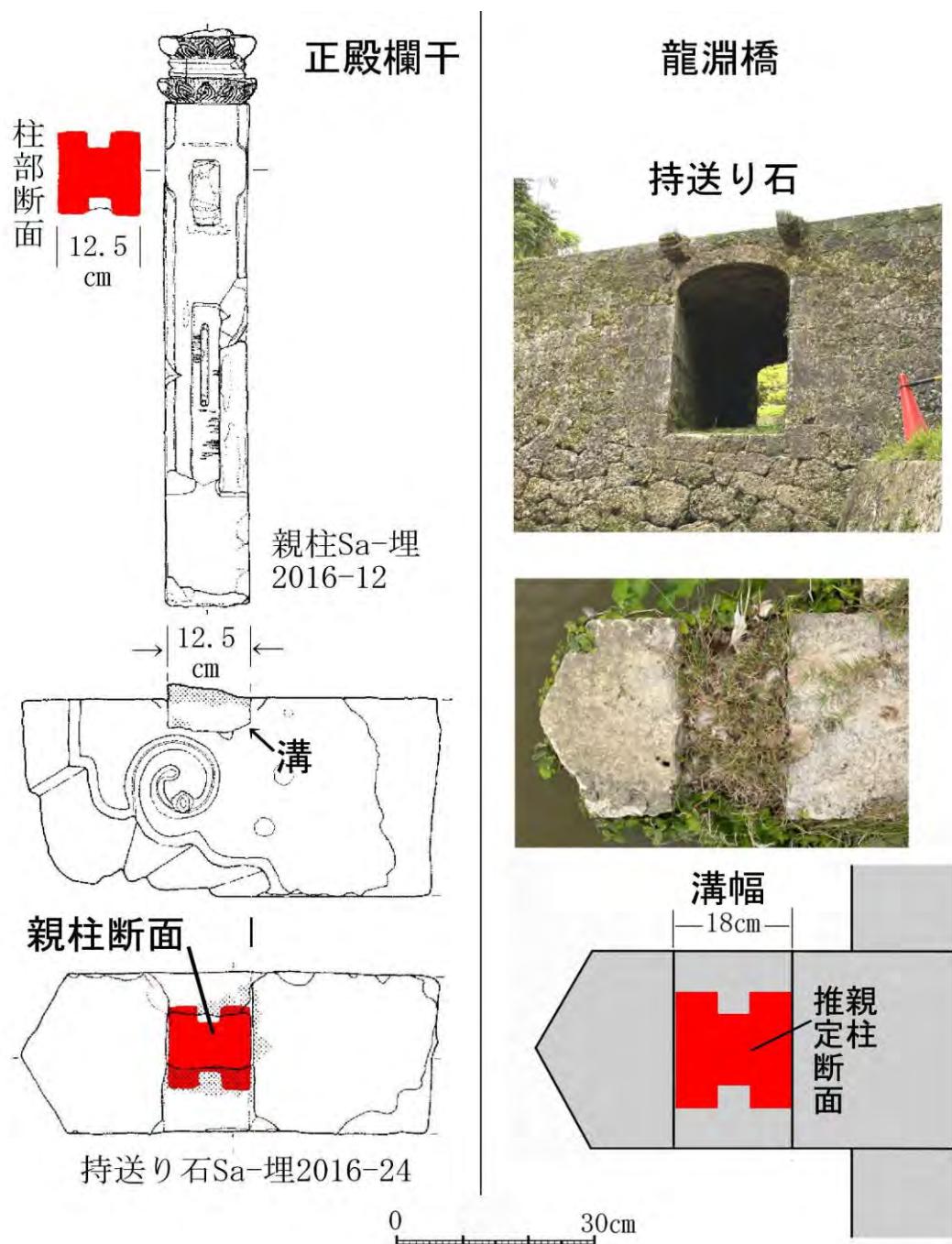


図 24：首里城正殿欄干と龍淵橋欄干の持送り石の溝幅

玉陵欄干親柱の太さ

- ・玉陵欄干親柱 22 本全ての太さについて、『重要文化財玉陵復原修理報告書』に記載がある。
- ・東欄干と西欄干で太さに差があり、東欄干が太い。東欄干 9 本の平均は 16.9 cm、西欄干 13 本の平均は 15.2 cm。
- ・ただし、東欄干 E 1 は、古写真の分析から近代に修理新造されたもので他の親柱よりひとまわり太い。東欄干親柱のオリジナルの太さは 16.9 cm よりやや小振りになる。

首里城正殿地区出土の欄干親柱の太さ

- ・首里城正殿地区出土の親柱には、戦前の親柱 (Sa 型式) と、これより古い型式 (Sg 型式) がある。
- ・古型式の親柱は、表 1 のとおり発掘調査出土遺物と博美蔵残欠がある。
- ・古型式の親柱は一辺 14.7 cm で、戦前正殿親柱（ほぼ均一で一辺 12.4 cm）より一回り大きい。
- ・古型式は、奉神門欄干の可能性がある。

表 1：玉陵と首里城正殿地区出土の欄干親柱の太さ

玉陵欄干親柱				首里城正殿地区出土・博美蔵親柱			
東欄干		西欄干		Sg型式 (古型式)		Sa型式 (戦前正殿欄干)	
親柱No.	柱身太さ 平均 16.9cm	親柱No.	柱身太さ 平均 15.2cm	遺物No.	柱身太さ 平均 14.7cm	遺物No.	柱身太さ 平均 12.4cm
E 1	18.6	W 1	15.6	Sg-埋2016-10	15.5	Sa-埋2016-7	12.5
E 2	15.6	W 2	15.2	Sg-博3	15.4	Sa-埋2016-8	12.3
E 3	16.0	W 3	15.1	Sg-博8	14.0	Sa-埋2016-11	12.5
E 4	16.6	W 4	15.1	Sg-博9	14.0	Sa-埋2016-12	12.5
E 5	17.6	W 5	15.1			Sa-埋2016-X4	12.2
E 6	17.3	W 6	15.1			Sa-埋2016-X5	12.3
E 7	17.3	W 7	15.1				
E 8	16.6	W 8	15.1				
E 9	16.6	W 9	15.2				
		W 10	15.2				
		W 11	15.7				
		W 12	15.4				
		W 13	15.2				

*玉陵欄干の数値は玉陵復原修理委員会1977『玉陵復原修理報告書』による。

*首里城出土は沖縄県埋蔵文化財センター2016『首里城跡正殿地区発掘調査報告書』の実測図・遺物から測定。

*首里城出土Sa-埋2016-X4・X5は遺物から測定。

*沖博美蔵Sa-博1は、遺物から測定

2、大龍柱遺物の3D合成

——欄干に連結した大龍柱背面のホゾ穴・無彫刻面の有無——

1) 大龍柱遺物の3D合成の意義

- 平成復元後、首里城跡正殿地区の発掘調査報告書が刊行されて、平成の大龍柱復元では利用されなかった新たな遺物の存在があきらかになった。
- また、沖縄県立博物館・美術館（以下「博美」）に古くから収蔵されながらも、平成復元には利用されなかった大龍柱残欠もある。
- これらの遺物には、大龍柱を理解するうえで新たな知見をもたらす重要な部位が含まれている。
- 令和の大龍柱復元に向けた技術検討作業では、既知の遺物・残欠を含めて沖縄戦前まで存在した大龍柱（ここでは「戦前大龍柱」と呼ぶ）の3Dスキャンを実施した。
- 遺物を3Dデータ化することで、これまで重量があって容易に遺物の観察や接合が困難だった遺物も、コンピュータ画面上でマルチ方向の観察や、博美と沖縄県埋蔵文化財センター（以下「埋文」）所蔵の遺物を接合して、全体像を観察できるようになった。
- 3Dデータ化で得られた重要な知見は、大龍柱の向きをめぐる議論の争点となった大龍柱背面の遺物を確認したことである。
- ここでは、大龍柱の背面遺物の3D合成で判明した新たな知見について紹介する。

2) 3Dデータ化した遺物

- 今回、3Dデータ化した遺物は、事前の遺物観察で戦前大龍柱の部位であることが確認できた博美、埋文、琉球大学風樹館（以下「風樹館」）に収蔵されている12点のうち11点である（図1）。図1⑧は遺物が確認できず3Dデータが作成できなかった。
- 11点の遺物のうち、平成復元で利用されなかった新たな遺物は、阿形の⑥⑦、吽形の⑪⑫である。
- 特に、阿形⑦（Sa-博4）は、大龍柱の背面に欄干と連結した痕跡（ホゾ穴や無彫刻面）の有無が確認できる重要な遺物である。

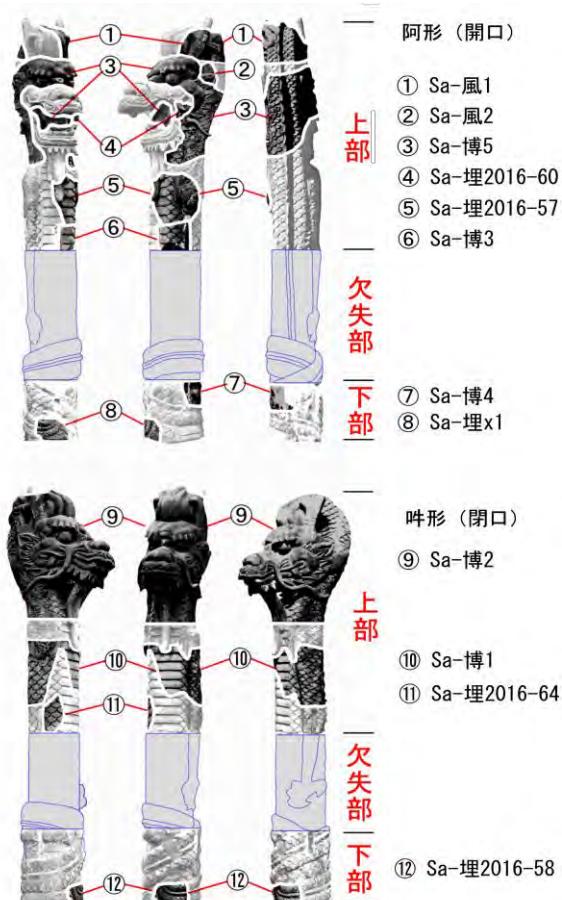


図1：3Dデータ化した遺物の部位

所蔵は、風（琉球大学風樹館）、博（沖縄県立博物館・美術館）、埋（沖縄県埋蔵文化財センター）。

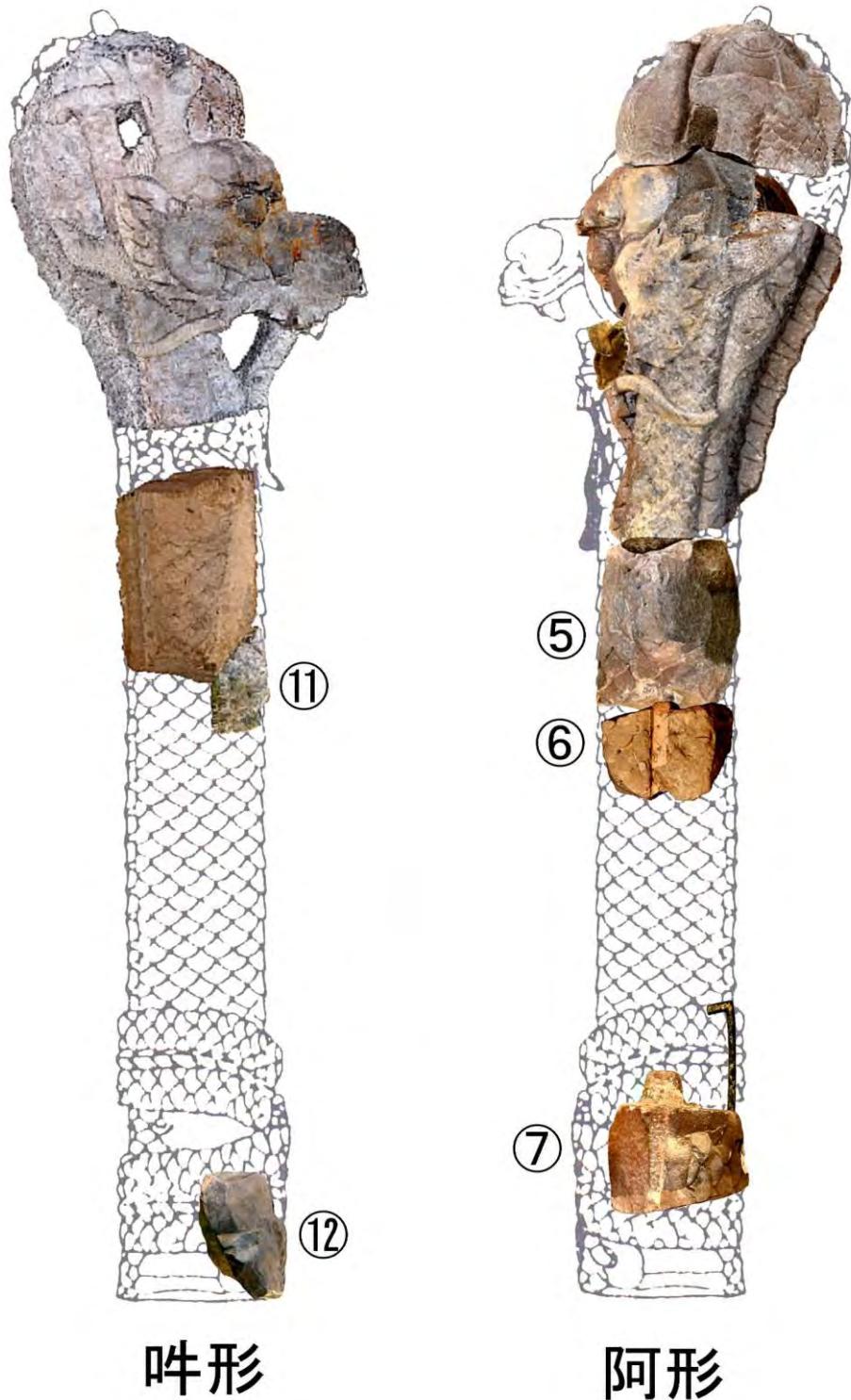
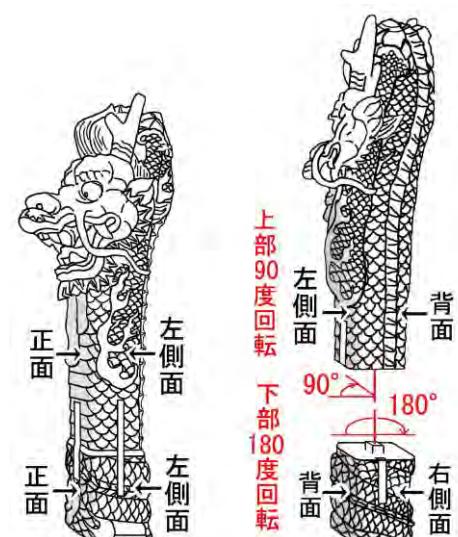


図 2：遺物の 3D 合成全体図

⑥⑦⑪⑫は平成復元で利用されなかった新たな遺物である。

3) 阿形大龍柱のトグロ巻部の背面位置

- 大龍柱は、明治期に胴体中央部分が切断除去されて胴体（上部）とトグロ巻部（下部）を接合した短縮形になった（図4）。
- さらに、昭和修理で大龍柱の向きを正面向きから向き合いに変えた際に、胴体（上部）とトグロ巻部（下部）の回転を90度ずらしている（図3）。理由は不明。
- その結果、昭和修理以後は、胴部の左側面にトグロ巻部の背面が位置したため、トグロ巻部の背面が御庭側に面することになった（図4）。



昭和修理以前 → 昭和修理の回転
(正面向き) (横向き=向き合い)

図3：昭和修理における大龍柱の回転

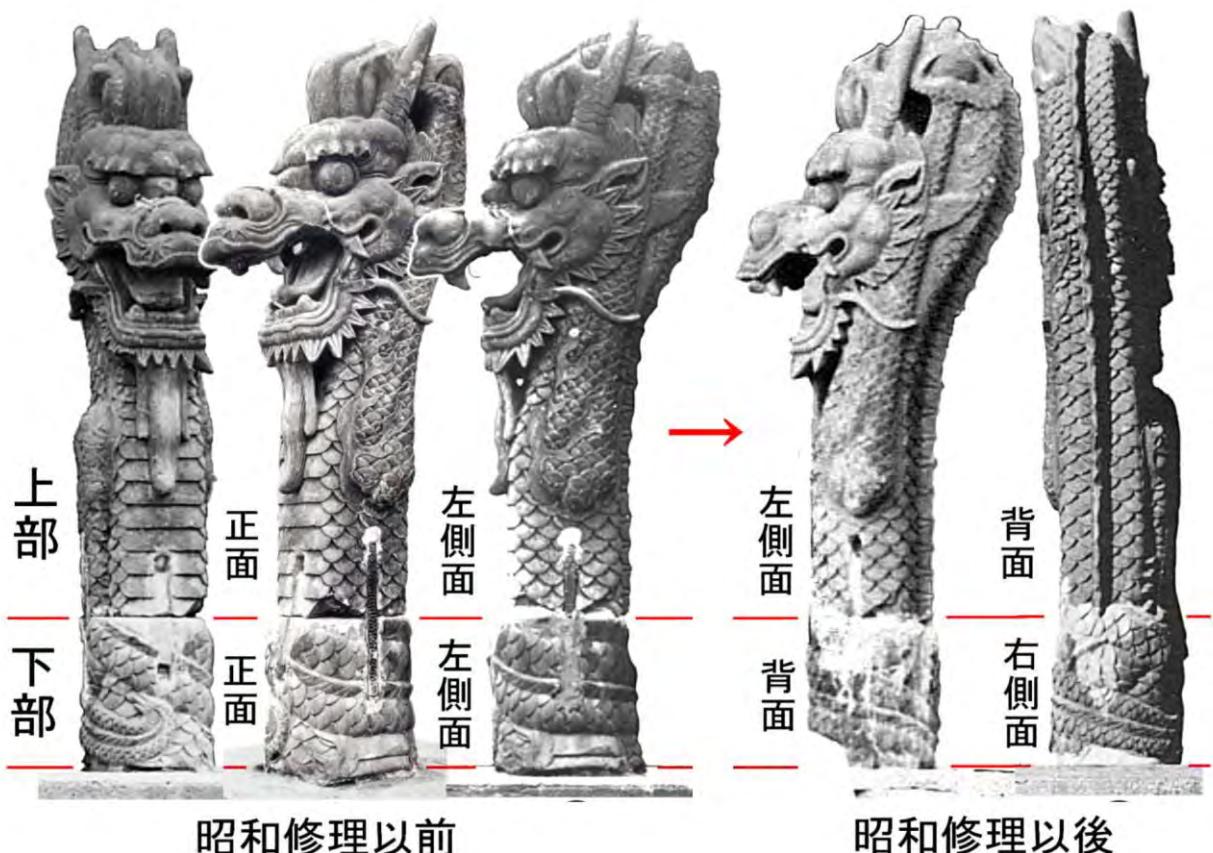


図4：昭和修理以前と以後の大龍柱の変化

昭和修理以後、大龍柱の背面側が御庭側に面することになった。安里 2022 「ホゾ穴と正面向き」（「琉球新報」2022年6月1日付け）より

4) 昭和修理後の古写真と3D遺物合成画像の重ね

- ・図5は、昭和修理以後の大龍柱阿形画像に、3D合成画像を重ねたものである。
- ・図2では、大龍柱が切断・短縮される以前の大龍柱の全体像に遺物の3D画像を重ねたが、図5では、昭和修理以後*の大龍柱画像に3D合成画像を重ねた。
- *正確には昭和修理中の写真で、大龍柱は回転しているが上部と下部を固定するためのカスガイがまだ打ち込まれていない。
- ・図5の3D合成画像は、戦前は一個体だった③⑤⑥の上部と下部（トグロ巻部）の⑦をホゾ組と銅製カスガイで固定した状態で接合したものである。



図5：昭和修理後の阿形写真と遺物3D合成の重ね図

- ・図6は、⑤⑥と⑦の接合状態の3D画像である。3D透過画像で、⑥のホゾ穴に⑦のホゾを嵌め、外側から銅製カスガイで固定していた状態がよく分かる。
- ・このホゾ組は、明治期に大龍柱を切断・短縮した際に、新たに上部（胴部）と下部（トグロ巻部）に一辺7cm程のホゾ穴とホゾを削り出して接合した時のものである。

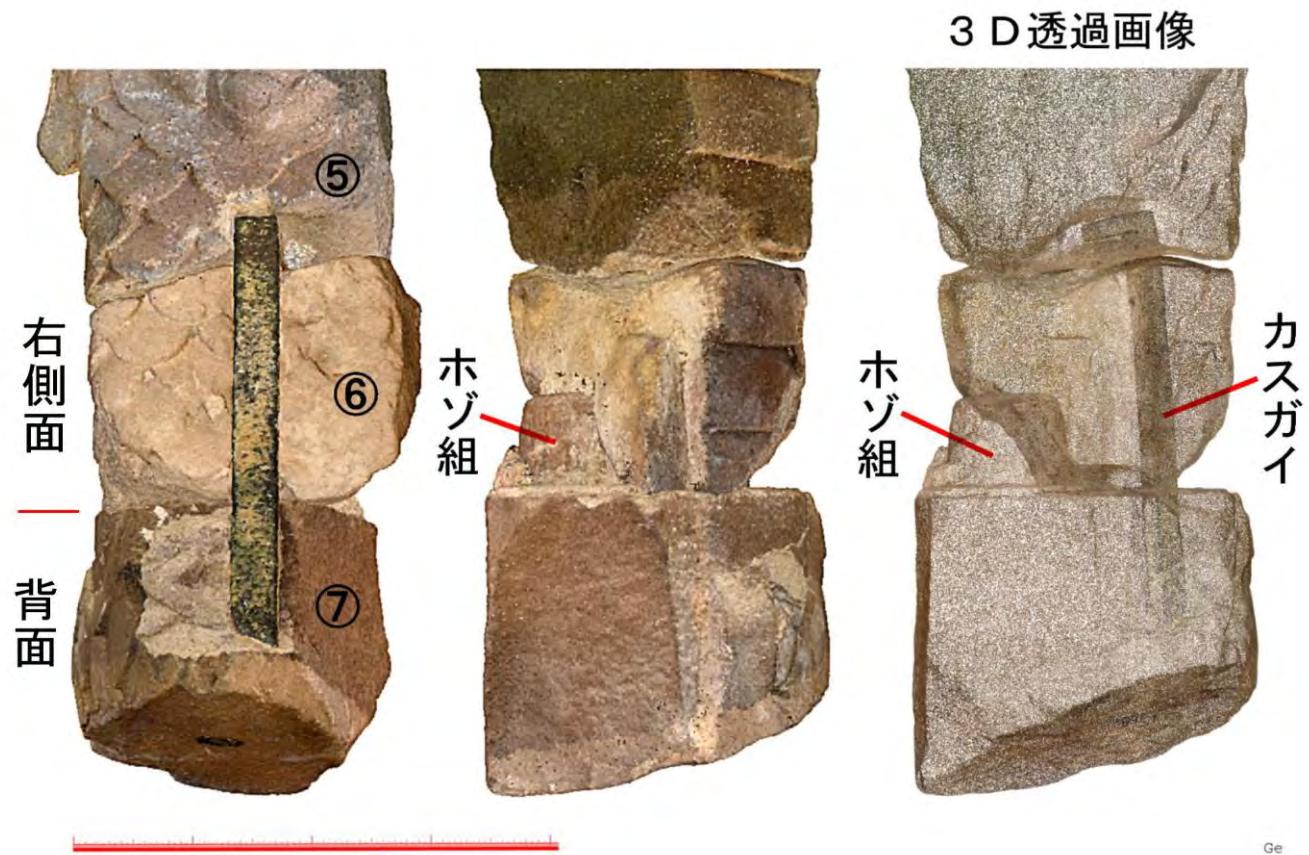


図6：⑤Sa-埋 2016-57・⑥Sa-博 3・⑦Sa-博 4のホゾ組とカスガイによる接合状態

5) トグロ巻部背面遺物のホゾ穴・無彫刻面の検討

- 以上の分析で銅製カスガイが付いた⑦Sa-博 4 が、阿形大龍柱の背面側遺物であることを確認した。平成の大龍柱復元以来、大龍柱の背面を撮影した写真はないとされてきたが、その写真も遺物も存在していたのである。では、⑦Sa-博 4 に、石階段欄干と連結した形跡はあるのか？
- まず、大龍柱が正面向きで、石階段欄干と連結していた古い大龍柱 (Sc-博 6) の連結部分を見ておきたい。Sc-博 6 の欄干連結部分にあたるトグロ巻部の背面は、ホゾ穴が断面四角形に彫られ、ホゾ穴がない部分は無彫刻の平坦面にして欄干耳石と密着するように加工されている（図7、第1回報告会の安里報告資料III-3 参照）。

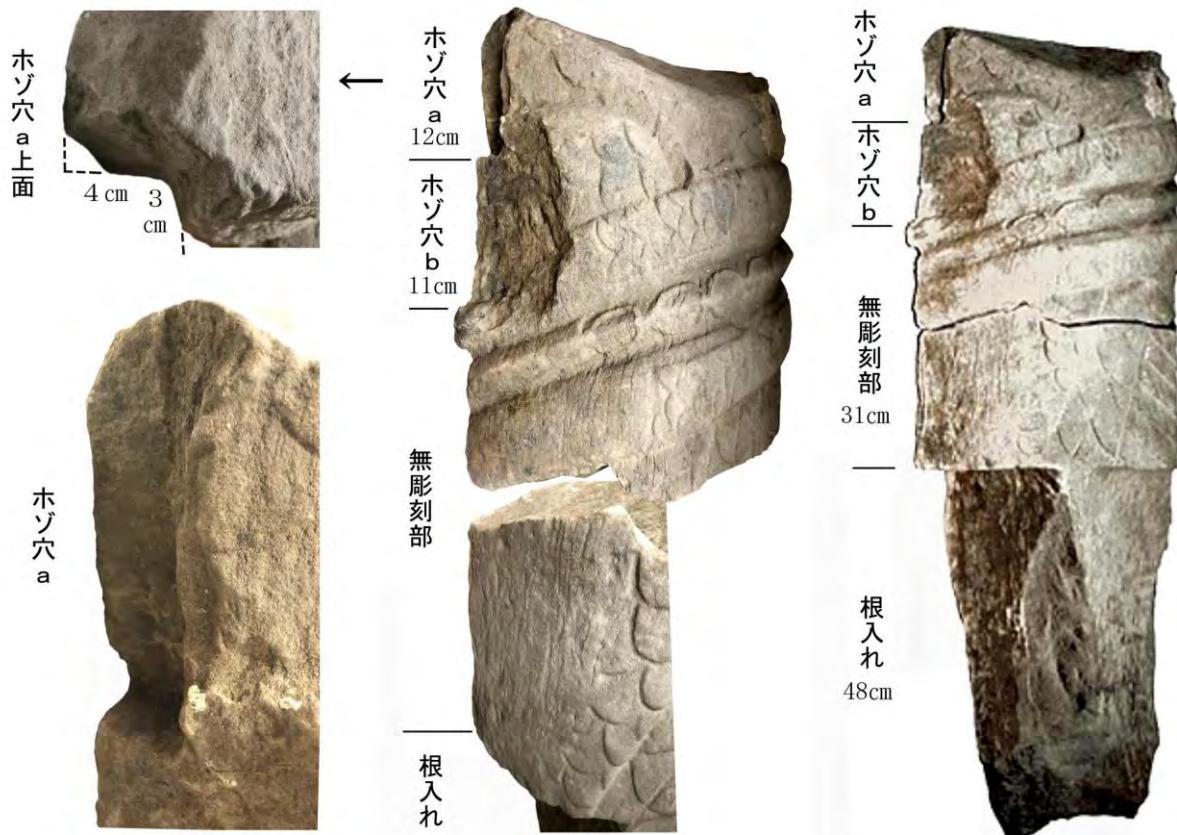


図7：Sc-博 6 背面で欄干接続面に加工したホゾ穴と無彫刻面

- Sc-博 6 の欄干との連結面の加工状態と⑦Sa-博 4 のトグロ巻き部分の背面を比較しよう。
- 図8は、⑦Sa-博 4 の側面と上面画像である。背面は、カスガイを打ち込んだ部分が大きく欠損していて石灰で補修している。
- 上面画像には欠損部分の断面が表れているが、破損した断面であって人為的に加工したホゾ穴の断面には見えない。
- また、欠損部分のまわりの背面にはウロコの彫刻があり、無彫刻面になっていない。

- ・ Sc-博 6 の欄干連結面の状態とは全く異なっており、⑦Sa-博 4 の背面が欄干と連結していた形跡は全く見られない。
- ・ Sa-博 4 の背面状態から、戦前大龍柱がかつては石階段欄干と背面で連結して正面を向いていたという証拠を得ることはできなかった。

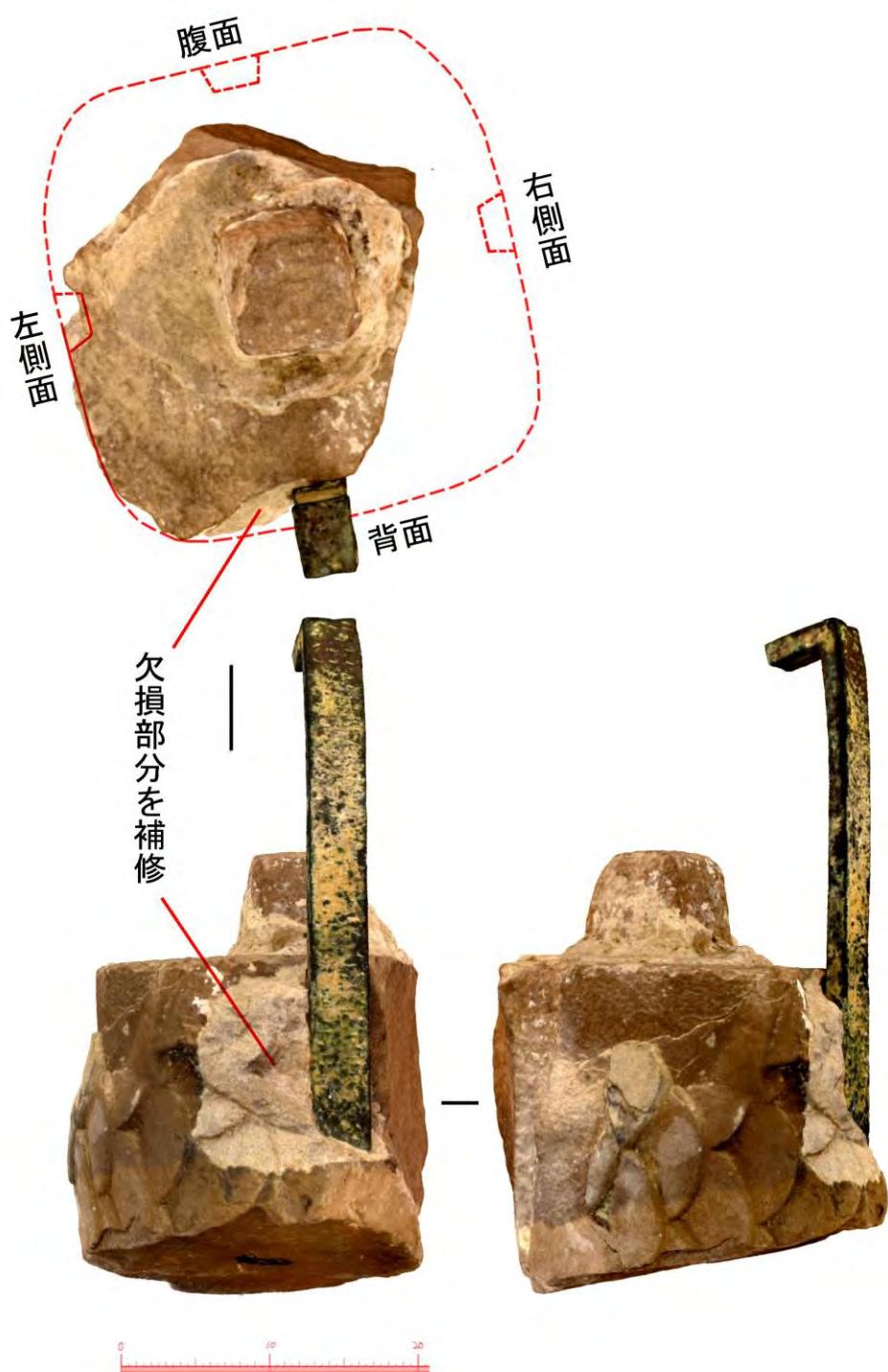
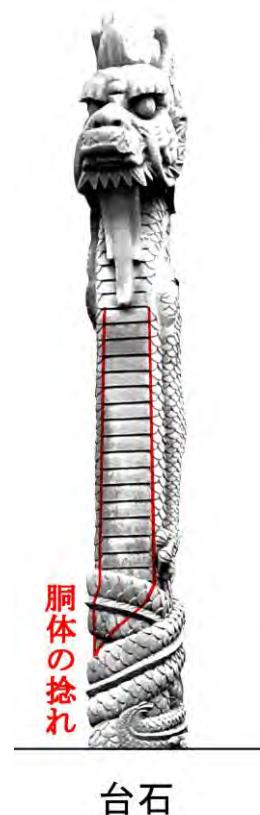


図 8：⑦Sa-博 4 の側面図・上面図

3、小龍柱の胴体捻じれの検討

1) 問題の所在

- ・正殿前の大龍柱は、鎌首をもたげた頭部につづく胴体が捻れながら台石中に入ったあと、反転して台石上に表れた尾部が胴体にトグロのように巻き付く構図になっている。
- ・平成復元の大龍柱の形状は、鎌首をもたげた頭部・真っ直ぐ立ち上がった胴部・トグロ巻部の3部構造になっている。胴部は真っ直ぐで、胴体の捻れはトグロ巻部の中で始まる（図1）。
- ・平成復元の大龍柱について、彩色彫刻作業チームの会議で、伊従勉氏から胴体の捻じれは胴体がトグロ巻部に入る前から徐々に捻れながらトグロ巻部に入っていくのではないかという指摘があった。「王国末期古写真」（「仏海軍古写真」）の分析による指摘である。
- ・この報告では、画像がより鮮明な『琉球建築』（田辺泰 1937）の小龍柱写真を分析して胴部の捻れの有無を検討した。
- ・また、胴部の捻れが始まる部位を特定するために胴部の腹板（腹面のウロコ）位置を基準としたが、腹板の枚数を確認するために、『琉球國』（Edmund M.H.Simon 1913）の小龍柱古写真もあわせて分析した。
- ・『琉球國』の小龍柱は明治末期の撮影、『琉球建築』の小龍柱写真は正殿の昭和修理以後の撮影である。



台石

図1：平成復元大龍柱の胴体の捻れ
トグロ巻部から捻れが始まっている

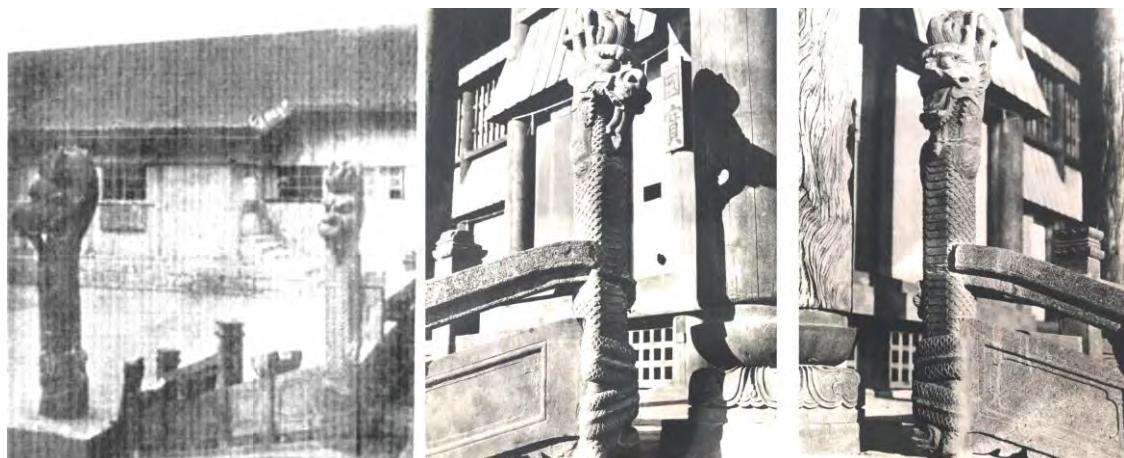


図2：『琉球國』の大小龍柱（左）と『琉球建築』の小龍柱（右）

2) 小龍柱の腹板枚数

- ・胴部捻れについては、どの部分から捻れが始まるのかという点を明確にする必要がある。
- ・捻れの位置を特定するために、鬚下端～トグロ巻部までの胴部腹板に通し番号を設定し、この番号を基準とした。
- ・『琉球國』『琉球建築』の阿行吽行ともに、腹板数は 22 枚。
- ・平成復元小龍柱の腹板数は 21 枚で、1 枚少ない。令和の復元では修正すべき箇所である。

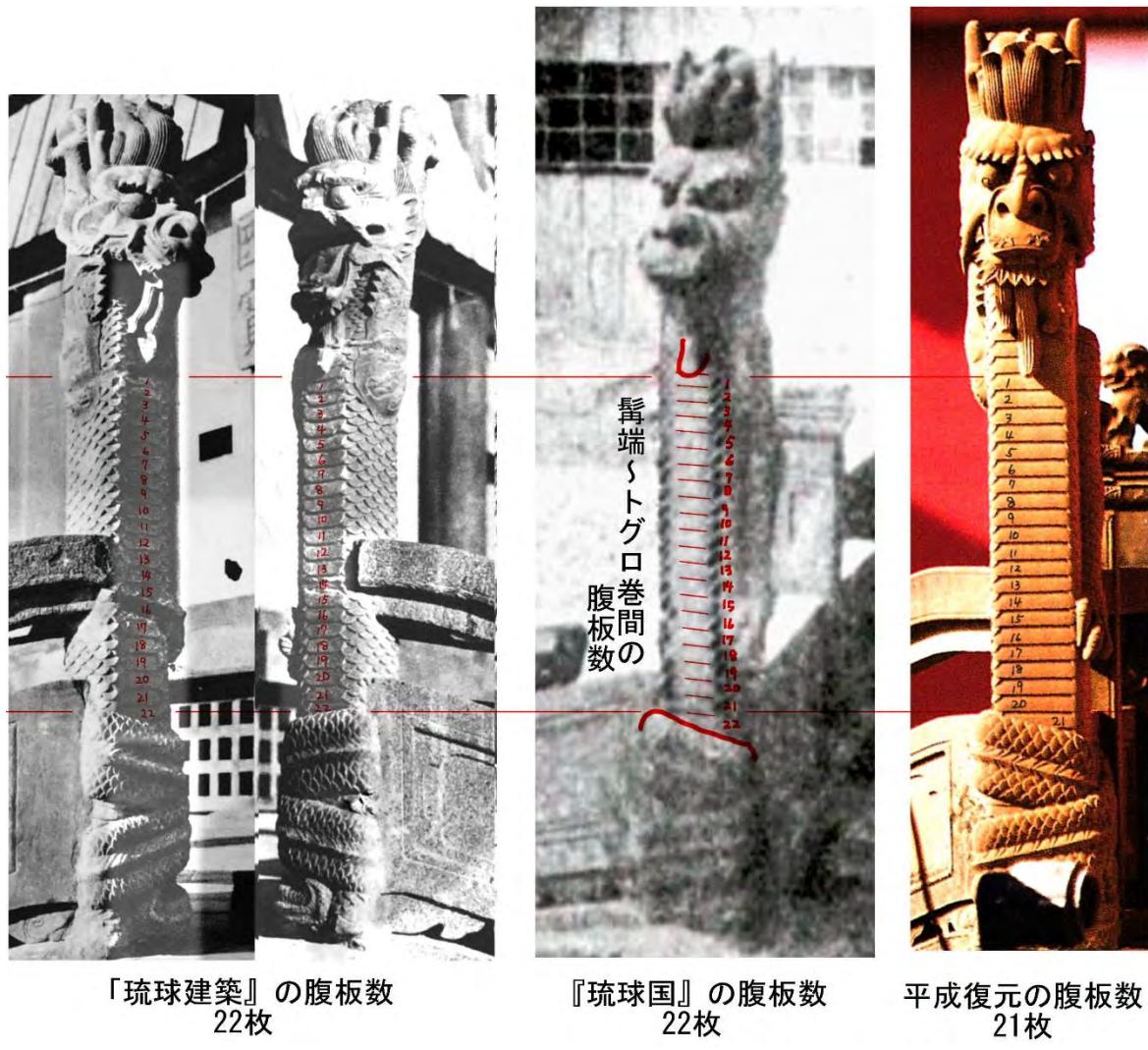


図 3：小龍柱の腹板（ウロコ）の枚数

腹板枚数は、顎鬚下端からトグロ巻までの枚数を数えた。平成復元は 1 枚少ない。

3) 昭和修理における小龍柱復元の検討

- ・小龍柱の阿形は明治 20 年代に失われた。吽形は大正 4 年の写真まで全形が確認できるが、大正 14 年までには失われている（「第 1 回報告会の安里報告 V 参照」）。
- ・大正期に撮影された鎌倉芳太郎写真には、吽形の頭部が撮影されている。
- ・昭和修理では、これらの残欠を接合し、欠失部分を新材で補修したと考えられる。
- ・昭和修理後の写真で、阿形・吽形に残欠を接合した力所が確認できる。
- ・阿形頭部の顔面、吽形の頭部の鬚先、阿形胴部の鬚先にそれぞれ欠損部分があり、鎌倉写真の残欠写真と照らし合わせると古材部分と考えられる。
- ・古材の頭部と胴部の接合部分が大きく抉れており、折損した古材を接合した様子がわかる。
- ・吽形の胴体下部（腹板No.16）の接合部分の抉れは、『琉球國』の吽形小龍柱でも同位置に確認できる。
- ・『琉球建築』の阿形・吽形小龍柱の接合力所（2 力所）はほぼ同位置で、これは、小龍柱が 3 パーツを接合して制作されていた形跡と考えられる。



図 4:『琉球建築』小龍柱の接合部分

4) 小龍柱の胴体捻れの検討

- ・まず、『琉球建築』写真の小龍柱を、垂直補助線に沿って垂直に補正して写真の歪みを除いた。
- ・龍柱のウロコは、遺物の測定では寸法が縦 6.5 cm・横 7.5 cm と規格的で、ウロコ全体も斜格子状に整然と配列されているので、胴体の捻れは、腹板だけでなく胴体側面のウロコの並びからも把握できる。
- ・腹板ウロコと胴体ウロコの接点、胴部ウロコどうしの接点をつなぐ線の流れから胴部の捻れの有無を検討した（図5）。
- ・阿形・吽形ともに腹板No.18あたりから、小さくなりながら緩やかに捻れ、トグロ巻き部に入っている（図6）。
- ・阿形の下部は、昭和修理の新造の可能性がある。そうであれば、昭和修理では、吽形小龍柱胴部の捻れを意識して、阿形の捻れを復元したと考えられる。

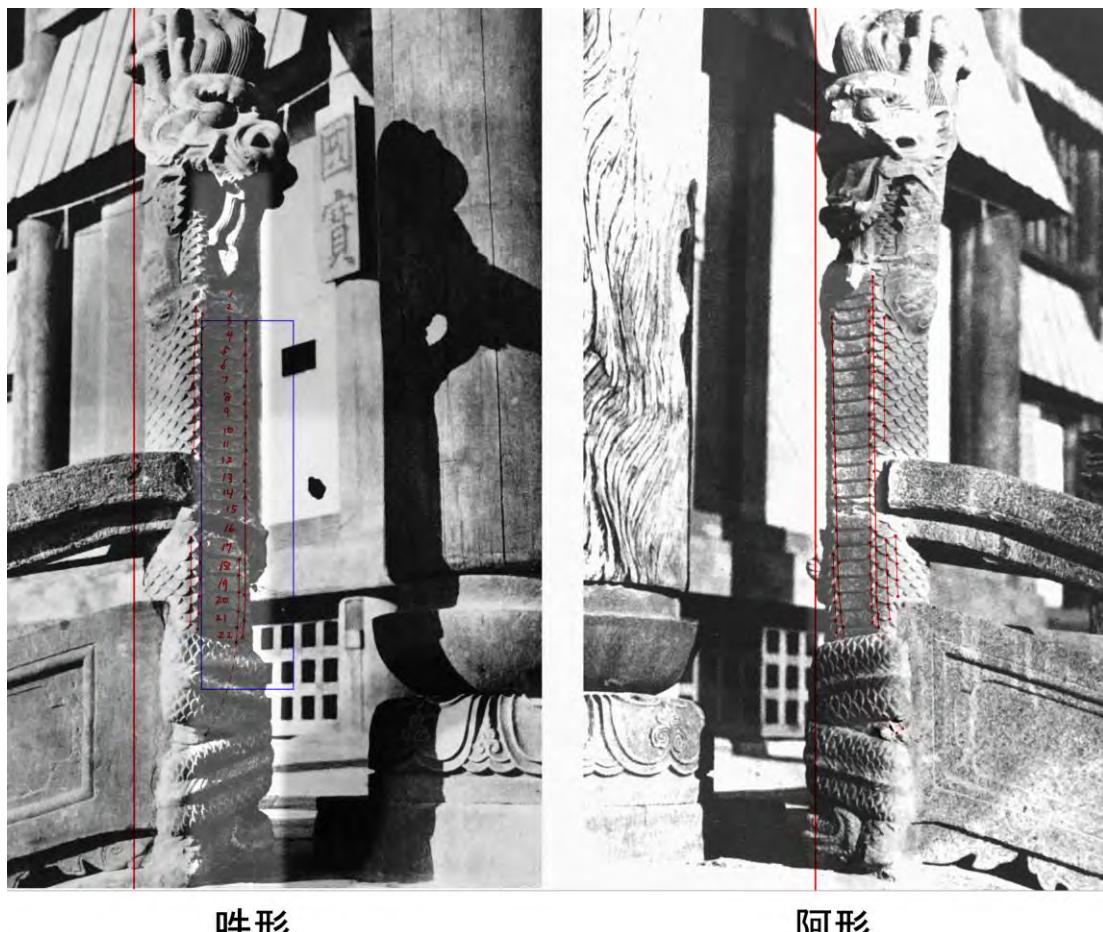


図5：『琉球建築』小龍柱の胴部捻れ

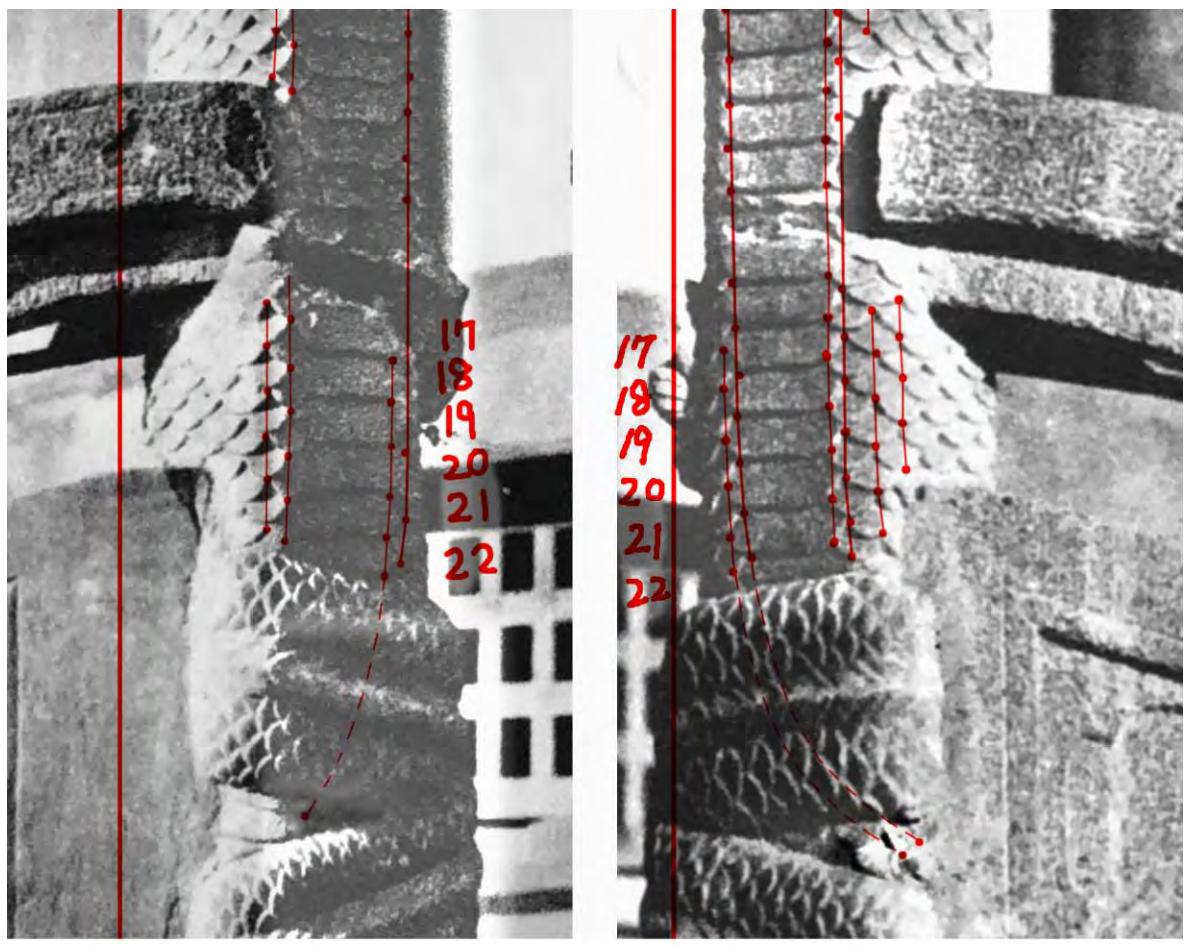


図 6:『琉球建築』小龍柱の胴部捻れ

- ・次ページに、新たに入手した小龍柱胴体の捻れが分かる古写真を紹介する（図7）。
- ・（一財）沖縄美ら島財団所蔵の森政三資料の一つで、昭和修理後に撮影された古写真から小龍柱吽形の捻れ部分を拡大したものである。
- ・『琉球建築』の小龍柱吽形と同じく腹板No.18、19あたりから緩やかに捻れて、小さくなりながらトグロ巻部に入っている。

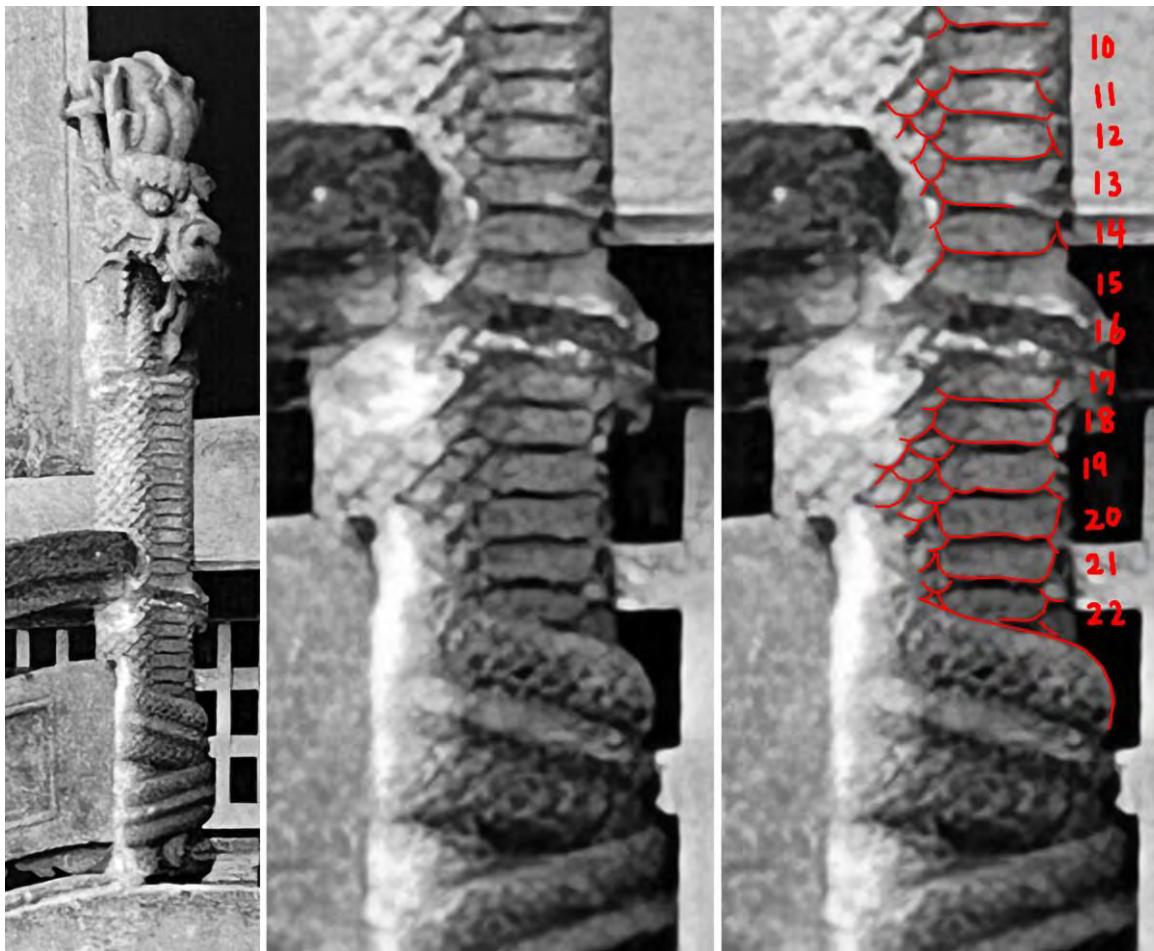


図 7：森政三資料の小龍柱吽形の胴体捻れ

(一財) 沖縄美ら島財団所蔵の正殿写真の部分拡大。

5) まとめ

- ・図 3 の平成復元小龍柱をみると、トグロ巻部まで胴部が直状になる形状は、かなり硬直した印象を与える。
- ・これに対し、胴体が緩やかに捻れていく小龍柱の形状は、捻れ方として合理的であるだけでなく、硬い石材に柔軟性を与えるもので、美的にも優れている。
- ・琉球の石造建造物には、微妙な曲線・曲面・歪みが至る所に用いられている。琉球石造建築物の大きな特徴であり、琉球人の美意識の反映でもある。
- ・「仏海軍古写真」の阿形大龍柱の捻れは画像不鮮明のため確定はできないが、小龍柱が捻れていることからみて、大龍柱もトグロ巻部より上の胴体から捻れが始まっていると考えるのが自然だろう。
- ・小龍柱だけでなく、大龍柱にも微妙な曲線・曲面が取り入れられていたと考えられる。。

4、玉座御床の「黄塗り」技法

1) はじめに

令和の首里城正殿復元では、正殿中枢エリアの漆塗装が大きく変わる見通しだ。御差床（玉座）と火の神を祀った「おせんみこちや」にある「御床」の壁が黄色から茶色に変わり¹⁾、御差床の上に掲げていた3面の巨大な中国皇帝扁額の赤色は黄色になる²⁾。この報告では、正殿塗装の変更に関わる「黄塗り」と「黄色塗り」の違いについて論ずる（詳細は注2の報告会資料参照）。

1) 沖縄総合事務局 2022『首里城復元に向けた技術検討委員会 報告会資料』。改訂版を、首里城公園 Web サイト「おしらせくホーム」で閲覧できる(<https://oki-park.jp/shurijo/information/detail/6620>)。

2) : 沖縄県ホームページ「令和3年度 首里城扁額製作検討委員会」



図1：首里城正殿御差床の御床と皇帝扁額（平成復元）

2) 平成復元の正殿御床の黄色塗装と皇帝扁額の朱塗（図1）

平成の正殿復元で、御差床とおせんみこちやの御床を黄色塗装にしたのは、正殿復元の根拠史料になった1768年の正殿修理記録『寸法記』（『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』）の図に、御差床とおせんみこちやの御床に「桐油黄塗り」という注記があったからだ。

また、1846年の正殿修理記録『百浦添御普請日記』によると、修理材料に高価な石黄（黄色顔料）が使われていた。黄色は王家の色とも言われ、王族衣装にも多く使われていたことから、正殿中枢施設にも高価な石黄を使用して黄色の漆塗装を行っていたと考えられた。

御差床の上に掲げていた中国清朝の皇帝扁額（「中山世土」「輯瑞球陽」「永祚瀛壻」）は、実物が失われていたため、平成の正殿復元にあわせて推定復元したものだ。これらの扁額についての彩色や装飾の詳細は史料がなく不明だったが、皇帝直筆の御書を首里城内（南殿）で琉球側が扁額に仕立てたことは史料から分かっていた。そこで、皇帝扁額の復元では、鏡板（地板）の塗装について記載した史料はないが、琉球扁額の特徴にもとづいて鏡板を朱塗りにしたのである。額縁も琉球扁額の特徴にしたがい、黒漆に箔絵で七宝繫文と宝珠双龍文を描いた。

3) 王府史料にみる「黄塗り」の道具

しかし、王府関係の文書には、「黄塗り」を単純に「黄色」塗装と考えることに疑問を抱かせる情報が多数ある。

- ①『伊平屋島玉御殿御道具帳』³⁾には「黄塗り」の雑道具が多数登場する。炭箱・たん後（担桶）、桶、下司板、鍋の蓋など 25 点もある。これらの雑道具に、高価な石黄を使用して黄色塗装をしたのか疑問がある。
- ②『琉球王国評定所文書』⁴⁾には、漂着民に支給した食膳具、欧米船員や英人宣教師らが所望したり購入したりした漆製品についての記録がある。これらの品々のなかに約 500 点におよぶ「黄塗り」や「桐油黄塗り」の道具がある。椀・たばこ盆・夜食膳・茶盆・盆・茶台・台などの日用品だ。これらの道具も、石黄を使用した黄色塗装の高級漆器とは考えにくい。
- ③『琉球王国評定所文書』には、英人宣教師ベッテルハイムが所望した「紫檀色員様深木碗」に「黄ぬり飯椀」と注記があり、「黄塗り」が紫檀の色であることがわかる（第 3 卷 p.161）。
- ④『仲吉朝忠日記』⁵⁾では、「黄塗り」が溜塗や春慶塗と同じ透漆や生漆を塗る技法として扱われている。日記のこの部分は薩摩藩への文書なので、「黄塗り」の意味が琉球と薩摩藩で共有されていたことが分かる。

3) 伊是名村教委 2007『伊是名村銘苅家の旧蔵品および史料の解説書』

4) 琉球王国評定所編纂委員会編 1988-2000『琉球王国評定所文書』第 1~15 卷、浦添市教委

5) 小野武夫編 1932『近世地方経済史料』第 9 卷、吉川弘文館

4) 貝摺奉行所関係文書の「黄塗り」技法（表 1・2・3・4）

- ①「雍正十一年ほか御道具図并入目料帳（仮題）」（18 世紀、天理大学図書館所蔵）の、青貝沈金交提重の家（外箱）は、文章末尾にある久米赤土を引いた上に漆塗装を施したと考えられる（表 1）。ここでも「黄塗り」には石黄は使用されていない。
- ②『貝摺奉行所文書』（19 世紀）⁶⁾には、「黄塗り」に使用する材料名と数量が詳細に記載されている。同書 2411 朱塗唐台の「黄塗下地」は、渋と壱度越漆（一度漉漆）を使用している。（表 3）
- ③同書 2304 朱塗沈金御棚の「黄塗」と「ふくり帰塗り」には、久米赤土・渋・壱度越漆を使用している。久米赤土と渋が「黄塗」と「ふくり帰塗り」に使用されたと考えている。いずれも石黄などの黄色顔料は使用しない。（表 2）
- ④『貝摺奉行所文書』（19 世紀）や「琉球漆器圖解」（1742）⁷⁾などの塗装仕様では、石黄の使用は、

沈金・箔絵・白檀磨・金箔磨・金箔押など金箔を使用する技法に限られている。(表4)

*以上の貝摺奉行所関係文書から、「黄塗り」は久米赤土や渋を引いた上に漆を塗った茶系色の塗装と考えられる。

*なお、「桐油黄塗り」は、「黄塗り」の上から桐油をコーティングした技法と考えられる。

*石黄は、金箔を使用する技法に限って使われている(金箔の下塗りに使用)。

*「黄塗り」については、謝敷真紀子⁸⁾が、『貝摺奉行所文書』の「黄塗」について、石黄ではなく渋が使われたことを指摘している。

6) 安里 進 2006 『貝摺奉行所関係文書のデータベース化』浦添市教委

7) 金城聰子 2001 「『琉球漆器圖解』」『浦添市美術館紀要』第8号、浦添市教委

8) 謝敷真紀子 2000 「『白檀塗樓閣山水箔絵湯庫』から見えてくること」『浦添市美術館紀要』第9号

5) 「黄塗り」と「黄色塗り」(図2)

①『冠船之時御道具之図』(1866年、沖縄県立博物館・美術館所蔵)には、清朝皇帝による琉球国王の冊封儀礼で使用する「桐油黄塗り」と「黄色塗り」の道具がある。「桐油黄塗り」は屏風の小道具と属官用の椅子の塗装。「黄色塗香案」は、皇帝を象徴する五爪龍文を刺繡した「黄縮緞子」を掛ける皇帝関係の机である。同一文書の図に「黄塗り」と「黄色塗り」があるので、両者は異なる技法と考えられる。

②『咸豊四年甲寅八月 御筆御表具并御額御仕立日記』(1854年、尚家文書、那覇市歴博所蔵)は、咸豊帝の御筆を扁額に仕立てた際の業務日記である。この中に、職人用の「黄塗多葉粉盆」(黄塗りの煙草盆)がある。一方、皇帝扁額の鏡板(地板)は「黄色塗り」に塗装している。

*琉球の冊封儀礼で使用した「黄色塗香案」や皇帝扁額の「黄色塗り」は、皇帝の専用色である明黄色系の塗装と考えられる。

*「黄色塗り」の具体的な技法解明は今後の課題である。

表1：天理大学図書館蔵『古琉球古文書』の
「御道具図并入目料帳」(18世紀)の「黄塗」事例

一大和吉野漆百六十枚	内式十七枚下絵書二入
一唐吉野漆四百八拾め	反故紙五十枚
一餅米壹升	一百田紙三十七枚
一麥之粉貳合五夕	一大和四寸金薄三十壹枚
一地粉八百十九匁	一下唐芋四匁
一着せ布長壹丈五尺八寸	一なたね油壹合五夕
一古芋物九十六匁	一貝摺脇主取拾三人
一延摺貝七十八枚	一上貝摺師貳百七拾五人
一延白貝拾貳枚	一中貝摺師五拾七人一分
一煮貝五拾六枚	一繪師五人
一檜白柾板壹割長三尺貳寸	一唐墨壹分 (五) リ
一砥之割貳百七拾四匁	一下木引 「 」
一銀子三分五リ	一木賊 □ □
一とほし灰墨五匁	一鹿之 □ 貳匁
一炭四升五合	(二) 久米赤土貳夕
一櫻木炭五合	右青貝沈金交提御重貳ツはんた
一五寸廻唐竹長壹尺	ニシテ蝶色塗調并家貳ツ黄塗仕申ニニ
一綿子五匁	
一宮古縫直上布長壹尺五寸	
一宮古縫直下布長三尺	
一吉野紙七拾八枚	

表3：2411 朱塗唐台の黄塗
下地の材料

一 はせお紙	10.85	枚
一 渡	0.11	合
一 上貝智師	0.12	人
一 壱度越漆	0.31	匁
一 古夢物	1.35	匁
一 炭	61.36	合
一 菜種子油	0.02	合
一 はせを紙	0.41	枚

但右黄塗下地ニ入◎

表2:2304 朱塗沈金御棚の黄塗ふくり帰塗りの材料

表4：漆芸技法と石黄・金箔の関係（『貝摺奉行所文書』『百浦添御普請日記』「琉球漆器圖解」）

冊子 No.	道具名	技法	使用材料	使用数量		備考
			赤金箔	摺石黄	和三寸角赤金箔(枚)	
	『百浦添御普請日記』		● ●	678.88*	56,324.00	* 4.243斤×160=678.88匁
『貝摺奉行所文書』	2302 朱塗沈金さすくい	沈金	● ●	1.11	30.54	
	2303 朱塗沈金さすくい	沈金	● ●	1.02	18.19	
	2304 朱塗沈金御棚	沈金	● ●	2.35	128.50	
	2305 朱塗沈金御花台	沈金	● ●	0.56	30.85	
	2418 朱ぬり沈金御櫛箱	沈金	● ●	1.00	101.72	
	2508 沈金さすくい	沈金	● ●	2.22	625.48	
	2510 沈金さすくい	沈金	● ●	1.11	312.72	
	2411 朱塗唐台	沈金	● ●	0.95	54.31	
	2405 朱塗沈金御料紙硯箱	沈金	● ×	*	101.04	* 摺石黄の記載漏れか
	2401 真塗沈金青かい交中央卓	沈金	● ●	1.14	195.65	
	2404 真塗沈金青貝交中央卓	沈金	● ●	1.14	195.65	
	2414 朱塗一垣貝摺御吸物椀	箔絵	● ●	6.70	4.40	沈金刀なし
『貝摺奉行所文書』	2414 真塗一垣貝摺御吸物椀	箔絵	● ●	6.70	4.40	沈金刀なし
	2411 朱塗唐台	金箔磨	● ●	0.95	54.31	
	2417 堆朱重々香合	白檀磨	● ●	0.19	18.20	
	「漆器圖解」朱塗二鬼面箔押花台	金箔押	● ●	1.00	240.00	
『貝摺奉行所文書』	2411 朱塗唐台	黄塗下地	✗ ✗	—	—	使用材料（渋・一度越漆・炭・菜種子油）
	2304 朱塗沈金御棚	黄塗*ふくり帰シ塗*	✗ ✗	—	—	使用材料（久米赤土・渋・一度越漆・菜種子油） * 黄塗は渋使用 * ふくり帰シ塗は久米赤土使用

・黄塗は、一度漉し漆と渋を使用。黄色顔料（石黄）は使用しない。

・石黄は、沈金・白檀磨・箔絵の技法で、金箔とセットで使用。他には使用されていない。

皇帝関係の香案・桺	冊封使・国王用の御轎倚・轎子	属官用の椅・轎子	小道具
黄絹緞子・黄木棉布・黄紗綾・五爪正龍文	紺緞子・四爪龍文	紺緞子・無龍文	屏風挾アサノ桐油黄塗
黄色塗	朱塗沈金	黄塗	屏風敷アサノ桐油黄塗
黄絹緞子・黄木棉布・黄紗綾・五爪正龍文	冊封使・国王用の御轎倚・轎子	属官用の椅・轎子	*あさノ=蟬の事(『混幼験集』)

図2:『冠船之時御道具之図』の「黄色塗」と「黄塗」道具の使い分け